

---

# Creation of Origin ~ 幻想たる魂 ~

如月 充

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Creation of Origin 〈幻想たる魂〉

### 【Nコード】

N2305Z

### 【作者名】

如月 充

### 【あらすじ】

2112年。オンラインゲームも過去と比べかなり進歩し、殆どがVRとなっていた。

その中でも、特に人気なのが、運営会社【ワールドクリエイト?】が造ったVRMMORPG【Creation of Origin】というゲームだった。その理由は、基本プレイは無料だが月500円で【ワールドクリエイト?】から自分専用のサーバーを準備してもらい、そのサーバーに【ワールドクリエイト?】が提供するオブジェクトを配置していき世界を創造することが出来る上に、フ

レンドと一緒にその舞台を冒険できる為だ。更に、自らクエストを作る事も可能である。

そんな、大人気オンラインゲームを駿河浩司は春日繁人から誘われプレイを始めるのだった。

この物語に登場する、実在もしくは歴史上の人物・団体・国家その他固有名称特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません

第1話（前書き）

2011/12/08 おかしいと思われる地の文章を何箇所か修正。

## 第1話

2112年4月27日。駿河浩司すまがこうじは、ベッド、勉強机、クローゼット、そして卵形のVRシステム『エッグ』のある自分の部屋で、ワクワクとした表情で、横に設置されている『エッグ』を見ていた。今、浩司は『エッグ』にVRMMORPG【Creation of Origin】というゲームをインストールしている最中である。

【Creation of Origin】とは、今世界で一番ユーザー数の多いゲームと言われている。その理由は、基本プレイは無料なのだが、運営会社『ワールドクリエイト?』に月額500円という安さで自分専用のサーバーを用意して貰い、そのサーバーに『ワールドクリエイト?』が用意しているオブジェクトを使って、世界を創り、創った世界で冒険をする事が出来るのである。もちろん、他のユーザーもだ。

更に、自らクエストを創る事が出来るのである。ただ、残念ながら自ら創ったクエストには参加できないため、友達と一緒にそのクエストを楽しむことは出来ないらしい。ここは、少し残念な気持ちになる。

しかしだ。このインストールさえ終われば、無限の世界が広がっていると思うと浩司は、気持ち着急いてくる。まだか、と思い『エッグ』と繋がっている勉強机の上に置かれているデスクトップパソコンを見る。

その画面の中央には、小さなウィンドウが表示されておりそこには【Creation of Origin】インストール中! 90%完了! 後約1分と表示されていた。

あゝ、早く終われ! と願いつつも浩司は携帯を取り出し、このゲームをやるきっかけを作ってくれた友達にメールを送る。

シゲ、後1分でインストール終わる。

というメールをシゲ。春日繁人<sup>かすが しげと</sup>という名前の高校に入ってから出来た友達に送った。

メールを送って、インストールが完了したというメッセージが表示されて直ぐに浩司の携帯に、受信を報せる音楽が流れる。

りよゝかい！ 俺は、もう入ってるから、ヴェスナーってキャラが俺なんだけど、入ったらヴェスナーにメッセ送ってくれ！

浩司は、内容を確認すると携帯を机の上に置き『エッグ』の中へと入る。『エッグ』の中は、淡く青白く照らされてベッドが置かれている。浩司は、ベッドの上に置かれている目まで隠すヘッドセットを手に取り頭に被る。そして、被った状態のままベッドに仰向けになる。

すると、浩司の視線には様々なVRに対応しているソフトの一覧が表示される。そして、先程インストールしたばかりの【Creation of Origin】のマーク。正面を向いたロープを被った人間が、下にある小さな地球だろうか？ 青い球体に、両手を添えるようなマークがあった。何だか、ゲームタイトルとイメージ違うな〜と思いつつもゲームを起動させる。

「クリエイションオブオリジン、起動！」

浩司は、音声起動によりゲームを起動させた。すると、突然視界が暗くなり浩司の体の感覚が、死んでいくように無くなっていく。

「（いや、死んだ事無いから判らんけどな？）」

5秒ぐらい経つと、浩司の視界が元に戻る。しかし、そこに映って

いるのは、先程のVR対応ソフトの一覧表示ではなく、円形で、中央に黄金に輝く椅子がありそこには、白くなったひげをかなり、たぶん10センチぐらい伸ばしている茶色いローブを着た爺さんが座っていた。そして、この場所は空にでも浮いているのかやたらと空が近い。

浩司は、とりあえず無事にゲームの中に入ったと認識する。そして自分の姿を見ようと思ひ、顔を下に向ける。そこには、素肌が表示されていた……何てことは無かった。体全体を見る。どうやら、椅子に座っている爺さんと色が違って白いローブを着ていた様だった。とりあえず、どうすれば分からないが、爺さんに近づけば何か起ころうと考え爺さんに近づいていく。

「汝、名は？」

爺さんと、後4・5歩の所まで近づくと突然そんな問い掛けが爺さんの口から聞こえてきた。浩司は、まさかそんな問い掛けが急にされるとは思ってなかったため咄嗟に、

「浩司」

と言いそうになったが留まる。

俺は、ゲームを起動させてこの空間にやってきた。ならば、此処はゲームの世界だろ？ なら、その世界で名前を問われるという事はキャラの名前を決める場面じゃないか！ と思ひ当たり冷や汗を垂らしている様な気持ちになる。

「（あぶねえ、あぶねえ！）」

名前か。何が良いだろと考える。この世界で何がやりたいのか浩司は思ひ出す。もちろん、冒険だろ。それに、モンスター魔物との戦闘。それに、色んな人と接触するんだ。色んな事を見聞きして成長していききたい

と思う。

「（よしっ！ 成長って意味の言葉にしよう！）」

英語で成長は、グロウス。他は……確かフランス語で、クロワサン。イタリア語で、クレシタだったはず。何処かのネーミング辞典って本にそう載っていた気がする。

「グロウス」

浩司は、爺さんに向かってそう答える。すると、爺さんが、ビクツと肩を揺らす。そのまま30秒ぐらいか待って、漸く爺さんの口が開いた。

「グロウス。ふむ、良い名じゃ」

浩司、グロウスは内心その言葉に安心する。どうやら、他の誰かと被っていなかったみたいだ。被っていると、また考え直さなければいけないからめんどくさいんだよな。何故か、自分が使う名前の時はやたらと被ってしまう時があるんだよなと嫌な事を思い出してしまった。

グロウスは、それを振り払う様に頭を振った。

「わしは、ゼウス。また、会うときがあるう。それまで、頑張るが良い」

爺さんと名乗った名前に、ゼウス！？ と驚いているとゼウスが手を振り出した。そして、グロウスの体の周りに光が現れる。その光が現れると、またもや体の感覚が下から無くなっていく。

その何ともいえない感覚に、顔を顰めていると全ての感覚が途切れ

視界が暗闇に染まる。暗闇に染まったと思った瞬間には、視界が景色を映し体の感覚が上半身から戻っていく。

VRのオンラインゲームは初めてだから、この部分的に体の感覚が無くなっていくのはもちろん初めてで何か気持ち悪い感覚が体を駆け巡っていく。

そんな事を思いつつ、グロウスは周りの景色を見渡す。

そこは、昔の時代に帰ったような景色が広がっていた。レンガとかで家が建てられていると思っていたグロウスは、目の前に広がる竪穴式住居に驚かされる。もうこれは、村というより集落と表現した方が正しい気がする。

何だか、場違いな場所に來た気がして早くシゲじゃなかった。確かにヴェスナーだったな。にメッセージを送ろうと思ひ、ウィンドウを表示させようとする。確か、空中を右手で左から右に滑らすんだっ  
たか？

と、少し自信無さ気に滑らせる。すると、合っていた様で右手を滑らせた辺りにウィンドウが表示される。そのウィンドウには、

ステータス 恐らく、今の自分の強さなどが分かるんだろう。

スキル 確か、アタックスキルポイントASPを割り振って覚えたり、レベルを上げたりするスキルと、そのスキルに該当する行動を取れば熟練度が溜まっていきレベルが上がるスキルの一覧が見れるんだろう。

アイテム その名の通り、持っているアイテムが見れるんだろうな。

メッセージ お、有った！ 後で、送ろう。

ログアウト もちろん、ゲームから抜けるための機能だな。

一通り、ウィンドウに表示されたコマンド見ると目的であったメッセージのコマンドの辺りに指を突き刺す。すると、メッセージ機能が起動し左側の小さなボックスには、宛名。それさえ、入力終われば後は送る言葉を言えばその相手に送れるはずだ。うん、現実なら

傍から見れば変な人と思われそうだな。ゲームで良かった。  
という訳で、シゲこと、ヴェスナーにメッセージを飛ばそう。

ヴェスナー　　おゝい、俺やけど。今すぐ来れそう？

メッセージを飛ばす。無事に送れたのか気になってしまい待っている間、うぐんと唸ってしまう。しかし、30秒も経たない内に返事が来た。

>ヴェスナー　　グロウスって名前にしたんだな。ちょっと待つてる。今向かうから。

そのメッセージを確認し、グロウスは座って待つ事にした。とりあえず、ヴェスナーが来るまで暇だから、よく見ていなかった周りを見渡す。

やはり、最初の場所のためか見渡してもいるのは自分と同じ白い口を被ったプレイヤーが多い。それ以外には、1人だけやたらと派手な黄金に輝く兜に鎧を着ているプレイヤーがいたが、俺と同じ、始めたばかりの知り合いでも探しているのかなと特に気にも留めずに、今度は町というか集落だな。を見る。

視界に映るのは、竪穴式住居が四角形を形作るように建てられている。そして、その4つともが、中心に入り口を向けていた。その中心には、グロウスと同じくこの縄文時代みたいな場所とはかけ離れた物体があった。その物体は、見た感じコンクリートの様な素材で丸い物体が1つだけ浮いていた。これが、色々な世界や、拠点へ飛ぶ事が出来るポータルって奴だな。そして、丁度前と、後ろに門があり、集落を囲う様に柵が設けられていた。

まだ、ヴェスナーが来る様子がない。何をして待っていようかと考えていると、ふと思いつく。そういえば、武器を装備していない事に。グロウスは、思いつくと再びウィンドウを表示させアイテム一

覧を開く。

そのアイテム一覧には、木剣、木刀、木の大剣、木の弓、おもちゃの銃、木の杖という名前のアイテムが表示されていた。グロウスは、その中からとりあえず木刀を選択し両手で持つ。刀は、両手が塞がる変わり攻撃力は高いが耐久力が低い武器らしい。

一通りやっている、中央に設置しているポータルからプレイヤーが現れた。

そいつは、銀色の鎧で全身を覆っており今は左手に兜を持ち、背中には大きな剣が背負われている。そのプレイヤーの顔を見る。

顔は、10代後半ぐらいで活発そうな顔をしている。髪は、短髪で金。両目の色は、水色だ。そして、鎧で隠されているが体は帰宅部の癖に引き締まった体をしている。

現れたプレイヤーは、ヴェスナーだった。何だよ、めっちゃ強そうじゃないか。

その感じたままを、ヴェスナーに向かって言ってみた。

「強そうって……。これでも、まだ、レベル32なんだけどな」

始めたばかりのグロウスに、レベル32が高いのか低いのか分かるわけがない。反応に困っていると、ヴェスナーが言葉を追加した。

「今の最高レベルは、限界レベルの70だよ」

なるほど、確かに32は低いのかも知れない。でも、それなら俺はどうなるって話だよ！ と内心で怒鳴る。ゲームを始めたばかりなのだからレベルは1。そんな事は当たり前なのだから、言葉に出すような事はしない。

「まあ、今レベルを言ったけどこのゲームじゃある程度の基準ではないな。最高は70って言ったけど、最強は別のプレイヤーだし」

へえ、そうなのかと思いつつも、でもレベルは高い方が良いかなとも思う。だが、レベル云々よりも俺は、ゲームの説明だよ。システム関係は、ホームページで目を簡単に通したが、戦闘に関する事は時間の関係で見ることが出来なかった。だから、このゲームの戦闘形式は、実はまだ良く分かっていなかったりする。

「んじゃ、スキルとかの説明は後ですとしましてまずは戦闘しに行くか！」

「おう！ 宜しく！」

ヴェスナーが、そのまま後ろにあった扉を潜り草原のフィールドへと出るのをグロウスも付いていく。しばらく、草原を歩いていると犬のような顔をしていて二足歩行をする魔物を見かける。

近づいていくと、その魔物の頭上に緑色のバーと【ドッグ・ザ・ロー】という名前が表示される。

「んじゃ、まず剣とかの近接系のスキルは動きで発動させる。そして、遠距離系のスキルは発動したいスキルの名前を言って発動させるんだ」

そう説明すると、とりあえず戦って来いとヴェスナーが言う。グロウスは、言われた通り戦うため、ドッグ・ザ・ローへ走り出す。

ドッグ・ザ・ローに近づくと、両手で持つ木刀を振り上げ振り下ろす。グロウスの攻撃が当たり、ドッグ・ザ・ローの緑色のバーが半分ほどまでに一気に減り緑色から、黄色へと変化する。

攻撃を受けた事により、グロウスに気づき攻撃を仕掛けてくる。ドック・ザ・ローは右手に持つ剣を横に払ってくる。それを、グロウスは後ろに下がり避ける。避けると、右から後ろに回りこみ同じように横に払って攻撃する。

そして、その攻撃を食らってドッグ・ザ・ローは悲鳴を上げると体の動きを止め、体を分散させ消滅していく。  
グロウスは、こうして初めての戦闘を難なく勝利したのであった。

「ほお！ さすが、やるなあ〜」

グロウスの戦闘に何処か感心した様な声を出したヴェスナーは、グロウスに近づいてくる。

「ま、戦闘はそんな感じで。とりあえず、始まりの集落に戻ろうか」  
そう言っつて、ヴェスナーは集落のあった方角へと歩き出した。グロウスも、ヴェスナーの後ろについていきながら、やっぱ集落でよかったんだと思った。

## 第1話（後書き）

え、まだ完結していない作品があるのに書いてしまった……。何やってんだと思いつつも後悔はしていません。

出来れば、そちらも読んで貰えると嬉しいかな。

更新ですが、不定期なので申し訳ないですがご了承ください。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

そして、拙い作品ではありますがポイントやお気に入り登録などして頂けると作者の励みとなりますので、よろしければお願い致します

## 第2話

プレイヤーキャラクター  
駿河浩司のPC名グロウスが現実の友達、春日繁人のPC名ヴェスナーに誘われ、始まりの集落から草原のフィールドへ向かい、そこで「ドック・ザ・ロー」という犬顔の魔物との初の戦闘を勝利で収め、始まりの集落へと戻ってくる。

そして、他のプレイヤーの邪魔にならないように草原へ出る出入り口の端による。それから、先程の戦闘では保留していた説明が、ヴェスナーからされる。

「それじゃ、スキルの説明をするけどまずはスキル一覧を開いてくれ！」

ヴェスナーに促され、グロウスはスキルの一覧を表示される。そこには、戦闘系・生産系・パッシブと更に、分けられていた。

ヴェスナーの説明によると、戦闘系は更に剣技・刀技・短剣術・槍術・弓術・銃・火魔法・水魔法・土魔法・風魔法・治癒魔法・戦闘技術と12種類と分かれている。

剣技・刀技・短剣術・槍術・弓術・銃・火魔法・水魔法・土魔法・風魔法・治癒魔法は、レベルが上がって貰える<sup>アタックスキルポイント</sup>ASPというポイントを消費し、該当するスキルを覚えて使う事ができるようになるスキル。そして、その覚えたスキルを使っていく度に熟練度が貯まりスキルレベルが上がっていく。

戦闘技術とは、既に空中戦闘・水中戦闘・暗闇戦闘と3種類のスキルを覚えていて、その特殊な戦闘を行うことで、該当するスキルの熟練度が貯まりレベルが上がるとその状況での戦闘が有利に運べるとの事だ。

そしてこのスキルを見て粗方分かるだろうが、武器の種類も、剣・刀・短剣・大剣・槍・弓・銃・杖の8種類となっている。

次に、生産系だが錬金術・鍛冶技術・薬学の3種類のみ。これも、既に取得しているので、熟練度を貯めるだけだ。

錬金術は、武器・防具に4属性を付加するスキル。鍛冶技術は、素材アイテムを使って武器・防具の製造。それに、使用して減った耐久値を回復させる修復作業も可能である。薬学は、HPやMPを回復させるポーション、麻痺・眠り・沈黙・毒・火傷などの状態異常を回復させる錠剤の作成。それぞれ、その行動を行うことで熟練度が貯まっていく。

次に、パッシブはこのスキルを覚える事で、その該当する効果が常時発動スキルだ。そして、パッシブはASPを消費してスキルレベルが上がっていく。

HP上昇・MP上昇・防御力上昇・麻痺耐性・眠り耐性・沈黙耐性・毒耐性・火傷耐性・剣上昇・刀上昇・短剣上昇・大剣上昇・槍上昇・弓上昇・銃上昇・杖上昇と一覧に表示されていた。

耐性系は、スキルレベルが上がる事によってその状態異常に罹りにくくなるスキル。HP・MP・防御力上昇は、スキルレベルが上がる事によって該当ステータスに、プラスされていく。剣上昇などの武器上昇系のスキルは、スキルレベルが上がる事によってその該当武器を使っている時に限って攻撃力が補正されるというスキル。

「という感じだな。それと、アドバイスだが武器はどれかに絞った方が良いぞ?」

「おう! 分かった。でも、どれを使おうか迷うな」

ヴェスナーのアドバイスに、どれを使おうかと迷ってしまふ。魔法も使ってみたいけど、剣や刀それに銃も使ってみたいという気持ちもある。とりあえず、色んな武器を使ってみて選べば良いやと、今は武器選択は保留とした。

それから、ヴェスナーに始まりの集落にある武器・防具屋、アイテム屋・預かり所を案内されると、集落の中央にあるポータルの前に

やってくる。

その前に立ち、ヴェスナーはポータルを見ながらグロウスに話しかける。

「このポータルは街に設置されている。このポータルを使って公式サイトに公開しているユーザーが創った世界や、『ワールドクリエイト?』の用意している別の世界へと行ける。それと、同世界で訪れた事のある街ならポータルを使う事で一瞬で転送してくれる」

ヴェスナーは、ポータルで他のユーザーの創った世界に移動する際の条件があると言い、説明してくれた。条件とは、ユーザーが付けたワールド名。もしくは、フレンド登録していればユーザー名で移動できるとの事だった。

そして、フレンド登録の話が出てきた時そういえばまだフレンド登録をしていなかったと思い至り、その事をヴェスナーに告げる。

「ははっ！ そうだったな！」

そうグロウスに言われるまで、ヴェスナーも忘れていたのだろう。ヴェスナーは、苦笑を浮かべ、ついでにフレンド登録の仕方を教えてくれた。

言われた通りに、メッセージを送る画面を表示させ送る相手をヴェスナーにする。そして、フレンド登録の申請を送る。

ヴェスナー　フレンド登録、ヴェスナー。

グロウスがフレンド登録の申請を送ると、側でヴェスナーが何も無い空中に手を動かし、何かの操作をした。すると、グロウスの視線の先にシステムメッセージが表示される。

『ヴェスナーが、フレンド登録の申請を受理されました!』

どうやら、これでフレンド登録は大丈夫なようだ。そして、グロウ  
スはいつの間にか夕食の時間になっている事に気が付きログアウト  
する事をヴェスナーに言った。

「わかった! それじゃ、俺も一旦落ちるかな。もし、今日また入  
るなら後でメッセ送ってくれ!」

「分かった。説明、ありがとな! 助かったよ!」

「気にするな、それじゃ此れから楽しく冒険しようぜ!」

そう言つて、グロウスとヴェスナーは握手をして2人ともログアウ  
トしてゲームの世界から消える。

PC名……グロウス LV1 次のLVまで5

取得済みスキル……錬金術LV1、鍛冶技術LV1、薬学LV1、

空中戦闘LV1、水中戦闘LV1、暗闇戦闘LV1

装備……右手、木刀。左手、なし。頭、なし。体、初心者  
のロープ。

腕、なし。足、初心者  
の靴。アクセサリ、なし。

## 第2話（後書き）

あの状況はまずいと思い、2話更新です。次回から、ちゃんとした冒険となります！ さて、浩司をどういうスタイルで行くのでしょうか？ その辺りも楽しみに待つて頂ければと思います！

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

そして、拙い作品ではありますがポイントやお気に入り登録をして頂けると作者の励みとなりますので、よろしければお願い致します。

### 第3話

初めて、【Creation of Origin】にログインしてから2週間経った。この2週間は、本当に充実した日々だと駿河浩司は思う。まさか、ゲームにログインするのがこんなに楽しみな気持ちになるなんて、正直思ってもいなかった。

学校とかに行っても、シゲと殆ど【Creation of Origin】に関する話しかしていない気がする。しかも、時間があればノートとかに今まで集めた情報を書き写していたりしている。自分でも、よくやるもんだと感心している所だ。だが、これでもまだ始めたばかりということで、自分で世界を創ったりしていないし、シゲの創った世界や他のユーザーの世界さえまだ行ってなかったりする。

だから、このゲームのメインは遊んでいない事になる。まだ、運営会社である『ワールドクリエイト?』が用意した世界の最初の世界である【プリンキビウム】にしか行ってないのだから、これから色々な世界に旅立つと考えると凄く楽しみだという気持ちで一杯になる。

そう、今日は【プリンキビウム】から別の世界に旅立つとうと考えている。その世界は、運営会社が用意している世界だというのに、公式HPやコミュニティなどでまだ、探索が進んでいないみたいであり情報が出て回っていなかった。

そんな世界があるのか? と疑問に思いシゲに聞いてみると、

「あゝ、あそこね。探索が進んでいないのは、本当だ。理由は、まあ……行ってみれば分かるさ!」

と、何故か少し気持ち悪そうな顔をしながら言っていた。

浩司は、シゲの反応が気になりながらも、シゲの言うとおりに行けば

分かるだろうと考え、帰ったら早速ログインしてその世界、【シユトライネイション】に旅立つつもりだ。

そして、学校が終わり家に帰ってくる。自分の部屋に入り、VRシステム『エッグ』の中に入りその中にあるヘッドセットを頭に付け、ベッドに横になる。

そして、ログインを開始し【Creation of Origin】の住人、グロウスになる。なる、といっても残念ながら【Creation of Origin】のプレイヤーキャラには、人間しかない。ならば、体型とか顔とか弄れるのかと言われると、いいえと否定するしかない。確か、認識能力に影響が出るとか何かで大幅な外見の変更は許されていない。許されているのは、髪型・髪の色だけだ。

ログインの影響で、一旦視界が黒く染まる。そして、再び視界が元に戻った時は、そこは【Creation of Origin】の世界だ。

グロウスは、自分がいる場所を確認する。目の前には、ポータルがあり、周りは木で囲われていた。そして、その木の上に木の板で作られた道があり、6軒ほど家が見える。此処は、始まりの集落から、南に8キロメートル程にある森の中の町【シバーヤフ】という所だ。グロウスは、前回ログアウトした時点でのステータスを確認するためステータス画面を開く。

PC名……グロウス Lv20 次のLvまで4039  
HP6218 MP319 攻撃力AP201 防御力DF310 魔法攻撃力MAGO  
魔法防御力MPDF78

取得済みスキル……ヴァーバルストライクLv4、エアガイストLv3、五月雨突きLv3、ファイアバレットLv2、アイスバレットLv2、ウィンドバレットLv2、ガイアバレットLv2、3W

ayバレットLv3、HP上昇Lv20、MP上昇Lv15、防  
力上昇Lv10、刀上昇Lv13、銃上昇Lv10、錬金術Lv1、  
鍛冶技術Lv3、薬学Lv4、空中戦闘Lv1、水中戦闘Lv1、  
暗闇戦闘Lv1  
所属ギルド……フリー  
装備……右手、打刀。左手、なし。頭、バルテスタ+2。体、バル  
コルポ+2。腕、バルアルム+2。足、バルクルース+2。アクセ  
サリー、なし。  
ライア……10238ライア

ステータスの確認を終えると画面を閉じる。その時に、見たライアの残り金額の少なさに驚く。10000ライアだと、武器を二回NPCの鍛冶屋で鍛えてもらったら無くなる金額だ。いくら、成功率100パーセントとはいえ上がる能力値もそんなに高くないというのに、一回5000ライアとか高すぎだよと思ってしまふ。

金の事は、どうせドロップアイテムとかいらぬ怪物の素材とか売れば集まる事だし今は、目の前にあるポータルを使ってこの世界から出る事を考える。グロウスは、はやる気持ちを抑えポータルの前に立ち、ポータルを起動させる。起動させると、今この世界で移動できる町の名前が表示され、その一番下に他の世界へと旅立つという言葉が表示されている。

グロウスは、その言葉をタッチする。するとポータルの画面が切り替わり、移動したい世界の名前、もしくはフレンド名というポップが表示され目の前にホログラムのキーボードが表示される。グロウスは、そのキーボードを使い【シュトライネイション】と入力する。入力が完了すると、グロウスの体の周りに光り輝くフラフープの様に丸いモノが表示されグロウスの体を上下に行き来する。すると、突然視界が暗くなる。そして、暗くなったと思ったら視界が復活する。

視界が戻り、グロウスの目に映るのは木造の家が並んでいる。家と

家を仕切るのは、木製の柵で向かい合うように建つ家の柵の間が道となっていてようだ。

そして、今グロウスが立ちポータルのある位置はこの町の中心地と思われ、東西南北と道が分かれている。それにしても、視界が暗いなど思い空を見上げる。そこには、暗雲が空を覆っていた。その為、今が昼なのか夜なのかと分からなくなってしまうそうだった。

視界が悪いが、これは今はどうしようもないと思いグロウスはどこちが町の外に行けるんだ？  
と思い周りを見渡す。周りを見渡すが、そこにはPCはプレイヤーキャラクターおらず、NPCはノンプレイヤーキャラクターばかりだった。

ふう、とため息を吐き近くにいた女性のNPCに話しかけた。そして、振り向いたNPCは何か怯えるような表情を浮かべ話し出す。

「魔王が、この近くに来ていてるって本当かい？ 何だって！ 南の洞窟に今は拠点を構えているだって！？」  
誰か、様子を見に行つてくれないかねえ？」

そのNPCの話す魔王という人物が、南の洞窟という場所にいるということ。グロウスは、目的地を南の洞窟と決めて向かう事にした。おそらく、その洞窟に行けば何かしらのクエストが、発生するのだらうと見当を付けて。

ポータルのある場所から、南へ向かう。10分ほど歩くと漸く町の入り口に着いた。それにしても、ゲームの中で10分も町を歩く事になるとはこの町結構広いんだなとどうでも良いことを考えてしまう。

そんなことを思いつつも、グロウスは一人で町の外に出る。外も、町の中と同じように暗雲のせいで光の差さない暗闇の場所となっていた。その為、遠くまで見通すことができない。見える範囲だと、どうやら草原だと思われるフィールドだ。

そのまま、少し歩いているとモンスターらしき影が1つ見えた。グ

ロウスは、刀を抜刀状態にしてその影に近づく。その影は、足でも怪我しているかの様にガクガクと体を揺らしながら歩いている。その歩き方に変わったモンスターかなと思いつながら近づいていくとその様相が見えてきた。

そのモンスターは、武者が着ているような鎧兜を着ており、鎧兜の隙間から見える肌は、暗くて見えないが爛れている様に見える。警戒しながら、モンスターに近づくと完全に姿を現し、頭上にHPバーとモンスターの名前が表示される。そこに、表示されていたのは【落ち武者】だった。グロウスは、その名前に嫌なイメージをほぼ確定させつつも落ち武者にゆっくりと近づいていく。

グロウスの事に、落ち武者も漸く気づいたのか体全体をこちらに向けてくる。その落ち武者の顔を見て、グロウスは何故この世界が他のユーザーに嫌われているのか理由の一部かも知れないが、分かった。

その理由は、かなりグロテスクでリアルなのだ。その兜から覗く顔は、眼窩が抉れ目玉が飛び出ている。しかも、皮膚がなく肉が見えているのだ。おそらく、鎧の下も顔と同じ状況なのだろう。見ていたら、気分が悪くなってきたし戦う気力もなくなってきた。しかし、グロウスは何とか気力を振り絞り戦闘を開始する。

4・5メートルほど空いていた距離を詰めるためグロウスは走り出す。そして、後、1・5メートルほどの距離の時にグロウスは高くジャンプする。ジャンプして、落ち武者の頭上を飛び越える。飛び越える時に、右手に持つ打刀を落ち武者の頭に向かって振った。すると、スキルが発動する。落ち武者の後ろに着地したグロウスは、振り向きざまに打刀を両手で持ち直し落ち武者の首目掛けて振った。すると、今までのモンスターならどの部位で止めを刺そうが消滅のエフェクトを撒き散らすだけで終わった。なのに、この落ち武者は首と体が離れて消滅のエフェクトを撒き散らした。

「何で……こんなにリアルなんだよ……!? うえっ」

グロウスは、ゲームの中だというのにえづく様な行動を取る。それほど、リアルなんだよと誰もいないのに説明しなくなった。それにしても、何で『ワールドクリエイイト?』は、こんなリアルな処理してるんだよ。完全に今のは18歳未満駄目だろ! と文句を言いたくなる。

グロウスは、暫くその場で休み少しは気分がマシになった。後でお客様サポートに文句言ってやると思い、先に進もうと歩き出す。もしかしたら、落ち武者なる魔物が徘徊しているのは、あのNPCが言っていた魔王が関係しているのじゃないかと思いい先を進もうと思っただ。

そして、1人でフィールドを進んでいると奥から何やら大量の落ち武者に追われている女性プレイヤーがこちらに向かって凄いスピードで走ってくる。

それを、見たグロウスは後ろへ向き直る。そして、グロウスも逃げ出すように落ち武者たちに結果追われ始めた。  
女性プレイヤーが、隣に並ぶ。

「ちよつと、君! 助けなさい!」

「ちよ!?! いきなり、助けなさいとか何だよ!? せめて、1体2体だろ!?! 何であんな数引き連れてんだよ、お姉さん!?!」

「洞窟の前に、居たんだからしょうがないじゃない!」

洞窟の前にあんなに大量の落ち武者がいるのかよ!? と叫びたくなる。後ろで追いかけてくる落ち武者の数。どうみたって、50体以上なんだから。グロウスは、早速魔王討伐に向けていた気持ちが折れそうになっていた。

グロウスと女性プレイヤーが、落ち武者50体以上に10分近く追われ続け町に入る事で、その逃走劇は終了した。

「はあはあ」  
「はあはあ」

グロウスと、女性はお互いに息を整える。1分ほどして、漸くお互いに息が整い喋る事ができるようになった。

「ロイエよ。ごめんなさいね、迷惑を掛けたわ」

「グロウスです。いえ、おそらく自分も同じ事になったと思うんで「ねえ、グロウス君。もしかして、君も魔王とかいう奴を倒しに行こうとしてた？」

「グロウスでいいですよ、ロイエさん。ええ、そうです」

「私のことも、ロイエでいいわ。ねえ、目的一緒だしフレ登録とパーティー組まない？」

ロイエの提案に、少し考えるがあの大量の落ち武者は1人じゃ絶対に無理だろうと思う。1体1体は、弱い可能性があるが大量だと攻撃を防ぐ事も避ける事も限界だろう。ならば、2人。いや、出来れば後1人。3人パーティーを組めたら楽だろうなと思い、後1人は勝手にヴェスナーを誘おうと考え、ロイエの提案を受ける。

『ロイエとフレンド登録しました！』

『ロイエとパーティーを組みました！』

### 第3話（後書き）

何だか、オンラインゲームの話書いてたらオンラインゲームやりたくなってきましたw

でも、やり始めると執筆が遅くなるという事になる……。どうしょ？

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

そして、拙い作品ではありますがポイントやお気に入り登録などして頂けると作者の励みとなりますので、よろしければお願い致します。

## 第4話

グロウスは、ロイエとパーティーを組むとヴェスナーにメッセージを送る。すると、1分も経たずに返事がやってくる。その返事には、

>ヴェスナー　悪い！　そのモンスター苦手なんだよ。だから、他の奴を誘ってくれ！

というメッセージが書かれていた。グロウスは、そこを何とか手伝ってくれる様に誠心誠意、頼み込む。それで、漸くヴェスナーは嫌々という感じではあったが手伝ってくれる事になった。

グロウスは、ロイエにヴェスナーが来てくれる事になった事を伝えポータルへと2人一緒に向かった。ポータルへ着くと、まだヴェスナーは来ていないみたいだった。

グロウスとロイエは、ヴェスナーがやって来るまでお互い、アイテム不足がないかチェックをした。グロウスは、アイテム一覧を開く。

ポーション(小)\*30、マナポーション(小)\*20、解毒錠\*10、麻痺錠\*10、睡眠錠\*10、ワルサーP5、ワルサーP5、ドック・ザ・ローの毛皮\*37、マンドレイクの葉\*54、シルフの欠片\*7、スライムの涙\*5

グロウスは、ポーションなどの回復アイテムなどは補充はこの数があれば必要ないだろと思いい補充はしない事にした。それにしても、毛皮や葉を売りに行くのと、シルフの欠片とスライムの涙を預けるのを忘れていたと思いい出す。

毛皮は、一応武器の合成素材として使えるが今は必要ないし葉に関しては、売却アイテムとしか使う道はない。それに比べ、シルフの欠片は、武器や防具に風属性の魔力付与を行うのに必要になるし、

スライムの涙はポーションやマナポを作るのに必要な素材となっている。一応、ポーションにマナポ。それに、他の回復アイテムも道具屋で買う事は出来るが、それだと薬学のLvが上がらない。上がらないと、中級や上級に属する回復アイテムが作れないからだ。道具屋には、回復アイテムは（小）までしか売っていないのだから。そして、ワルサーP5が2丁。グロウスが使うもう1種類の武器、銃だ。このゲームは、左右の腕に違う種類の武器や同じ種類の武器を装備できる。もちろん、両手でしか装備できない種類もあるのだが。

しかし、グロウスが使う打刀とワルサーP5は片手で扱える武器だ。なので、右腕に今装備している打刀。左腕に、ワルサーP5。といった風に違う武器を持つ事ができるのだが、グロウスは刀武器の特性である両手で握った状態ならば攻撃力が1.5パーセント上昇するという特性を受ける為に、左腕にワルサーP5を装備せずにいる。それに、今まで戦ってきたモンスター達の弱点の多くが斬属性のため、貫通属性である銃を装備する必要がなかったというのもあったのだが、それは置いておく事にする。

とりあえず、あの落ち武者の弱点は斬属性だろうと思いつつも、もしかしたらと考えワルサーP5を左腕に装備する。すると、グロウスの右の脇下にワルサーP5が収められたホルスターが現れる。それを、見たロイエが何か感心した様な声を上げる。

「へえ、グロウスって銃も使うんだ！ 珍しいね。大体が1種類の武器に、治癒魔法って組み合わせを選んで、後はパッシブスキルにASPを割く感じなのに……」

「あ、そういえば、ヴェスナーに武器は絞った方が良くって言われてた気がする」

グロウスは、初めてログインした時にヴェスナーに絞った方が良くって言われていたのを思い出し、忘れていたのを誤魔化すように頭

に手をやり笑う。グロウスとしては、これでも絞ったんだと心の中で言い訳を試みる。刀や銃以外に、大剣に槍、それに魔法も使ってみたかったんだ。でも、ヴェスナーの言うとおり絞らないと中途半端な感じになると想像はついたから、他のゲームでは中々出てこないという理由で、刀と銃に武器を絞り込んだんだ。でも、流石にそろそろ治癒魔法のスキルも覚えていかないと厳しいとも思うから次のLvUpの時は、治癒魔法を覚えるかと考える。

「全く……誘うなら此処以外で誘ってほしかったぜ」

そう愚痴を言いながら、漸くヴェスナーがポータルから現れる。実は、最初にログインしてからヴェスナーとは冒険に行く事はなかった。Lvが離れていたため誘い難かったのだ。ヴェスナーは、そんなの気にするなよ！ だから遠慮なく誘え！ と言ってくれたが戦闘などの操作にも慣れたかったグロウスは、今までヴェスナーと冒険する事は無かった為、今日がヴェスナーとの初めての冒険となる。だから、ヴェスナーはこの世界以外なら喜んで冒険に行くのに、と思っているんだろうなとグロウスは、やたらとため息を吐くヴェスナーを見ながら思っていた。

「まあいいや。それで、こちらの美人さんは？」

とロイエの事が気になっていたのだろう。グロウスに聞いてくる。グロウスは、ヴェスナーにロイエの事を紹介しながら、確かに美人だよなと思う。

髪は、黒のロングヘアで後ろで纏めている。顔は、綺麗系で大人っぽい雰囲気醸し出している。服は、グロウスやヴェスナーが着ている鎧タイプではなく、巫女装束を着ていた。そして、武器は弓だった。

「準備OKなら、向かいたいと思うけど？」

そうグロウスが尋ねると、ロイエとヴェスナーがアイテムの補充を  
したいと申し出る。グロウスは、それに了承の言葉を口にしてロイ  
エとヴェスナーが先に行くのを待つ。しかし、2人は歩き出そうと  
せず、ただグロウスの顔を見るだけだった。

「補充しに、行かないのか？」

「行くけど、お前が歩き出すのを待ってたんだが……」

「同じく……」

「いや、俺道具屋の場所知らないし」

グロウスが道具屋の場所を知らないと答えると、2人に呆れた表情  
をされる。そして、2人は道具屋を目指して歩き出した。その後ろ  
にグロウスはついて行く。

すぐにフィールドに向かった為に、グロウスは道具屋などの店の場  
所を知らないのだ。今まで、回復アイテムの補充やアイテム売却な  
どの用事ができない限り調べていなかったのだが、今度からは道具  
屋などの店は先に調べておこうと恥ずかしい気持ちにならない為  
に思った。

道具屋は、ポータルから北の方角へと向かい1つ目の曲がり角を曲  
がった所にあった。その中へと3人は入っていく。ロイエとヴェス  
ナーがアイテム補充をする間、グロウスも来たついでにドック・ザ  
ローの毛皮とマンドレイクの葉を売却する。

毛皮は、1つ150ライア。葉は、1つ80ライア。合計、987  
0ライアとなり所持金が、20108ライアとなる。その金額を見  
て、グロウスはマジックポーチ(中)を2個買おうと、一旦閉じた  
売買一覧を再び開き、1つ10000ライアするマジックポーチ(中)を2つ購入した。

マジックポーチとは、普通なら戦闘中でもアイテム一覧からポーチ

ヨンを使わなければいけないが、このマジックポーチに道具を入れておく事で戦闘中でも態々《わざわざ》アイテム一覧を開く事も無く使う事が出来る。

グロウスは、マジックポーチ（中）にそれぞれポーションとマナポを10個ずつ入れてアクセサリーとして装備する。マジックポーチ（中）のおかげで、戦闘中でも15までならポーションを使う事が出来るようになった。

グロウスが、準備を終えるとロイエ達を見る。すると、2人は既に補充を終えていて結局、グロウスの準備が終わるのが一番遅かった。

「悪い、待たせちゃったな」

「いや、構わんよ」

「ありがとう。それじゃ補充も終えたみたいだし行こうか」

グロウスが、待たせたことを謝るとヴェスナーがそう言い、ロイエも首を縦に振る。それに、グロウスはお礼を言うと今度こそ3人で南の洞窟に向かう。

急いで、洞窟へ向かうため極力戦闘は避ける。それでも、何度か【落ち武者】とエンカウントしてしまうが、最初の町に近いたためLvは低いためそれほど苦労する事も無く洞窟の前へと着く。そして、グロウスは最初のエンカウントで銃での攻撃が、通常ダメージしか与えられていない事が分かる。やはり、貫通属性は弱点属性じゃないかと思いつながら左腕に装備していたワルサーP5を外していた。グロウスは、洞窟の方を見る。そこには、2体の【落ち武者】が近づいて来る者がいないか洞窟の入り口に立ち周囲を見張っていた。その数に、グロウスはあれ？と思う。ロイエが引き連れてきたあの数の落ち武者は何処にいるんだと疑問に思う。周りを見渡してもその入り口にいる落ち武者の2体を除くと、4体しか見当たらないのだ。

「あの入り口の落ち武者を攻撃したら、洞窟の中から一気に出てくるから気をつけて」

そのロイエの言葉に、先程まで疑問に思っていた数について分かった。だが、グロウスとヴェスナーは、もしかしたら2体同時に倒したら大丈夫なんじゃないかと考えて2人はその場にロイエを残し、グロウスは、左。ヴェスナーは、右に落ち武者に気づかれない様に別れる。

2人とも、落ち武者に気づかれることも無くそれぞれの横に着く。そして、ロイエの合図を待つ。

>ロイエ 3!  
>ロイエ 2!  
>ロイエ 1!  
>ロイエ 今よ!

そのロイエの合図と同時にグロウスとヴェスナーは落ち武者に向かって走り出す。2人が落ち武者に、後2・3歩という所で気づかれてしまい2体の落ち武者は2人に向かい合う。

グロウスは、両手で刀を持ち右上から振り下ろす。そして、すれ違い様に切り払う。

ヴェスナーは、大剣バスタードソードを両手で持ち雄叫びを上げながら横に切り払う。

2人は、互いにすれ違いながら武器を収める。グロウスは、左腰に差してある鞘に、ヴェスナーは背中に背負っている鞘に。2人に気づいた落ち武者は残念ながら、反撃をすることも無くその命を散らした。

そして、2人は結果を見るため後ろに恐る恐るといった感じで振り向く。5秒ほどすると、洞窟の中から何か大勢が移動する音が聞こ

え始める。その音に、2人は無駄だったかため息を吐き、再び武器を抜く。それから、10秒ほどすると洞窟から沢山の落ち武者が出てくる。

グロウスは、今回は逃げることも無くその落ち武者を倒していく。グロウスの近くでヴェスナーとロイエもそれぞれの武器で倒していく。

5分程だろうか、漸く200体ぐらい居た気がする落ち武者との戦闘を終える。いくら、落ち武者のLvが低く1・2撃で倒せるとはいえ流石に5分近く休憩もなく戦うのはしんどいものだ。グロウスは、この先に進むのが少し億劫になりながらも少し休憩をしてから進む事を提案する。

「そうだな……はあはあ……それでいいぜ！」

「分かったわ……それにしても流石に多すぎるわよ！」

ロイエの言葉に、全くだと同意しながら1分程休憩をする。休憩を終えると、3人は洞窟の中に入っていく。入り組んだ道を、時々【落ち武者】・【スライム】・【ゴブリン】などの魔物と戦いながら、奥へと進んでいく。

洞窟に入り、15分。漸く、3人は洞窟の一番奥と思われる場所へと着く。そこは、行き止まりとなっており、中央に人と思われる影が両手を組みこちらを睨んでいた。3人は武器を構え、その影に近づいていく。

その影は、額・耳までを覆い隠しその頭頂部には2本角みたいに突き出す装飾が成された兜を被っている。そして、体には鎧を着ていた。

グロウス達3人は、その影の顔が見えるまで近づく。その顔を見ると、落ち武者の様に爛れた皮膚ではなく、ちゃんとした人間の顔だった。その人間は、髭で口元を覆われこちらを見る目は、数々の戦

場を潜り抜けてきた様に厳しい目つきをしていた。

「我、織田信長也！<sup>なり</sup> 何故、<sup>なにゆえ</sup> 我の邪魔をする！？」

そう言つて鎧兜を着けた織田信長は、グロウス達に向かつて刀を抜き攻撃を仕掛けてくる。その攻撃をグロウスとヴェスナーは咄嗟に剣で受け止める。しかし、予想以上にその攻撃は重く吹き飛ばされダメージを負つてしまう。

2人は、立ち上がり左右に別れる。唯一、後衛のため信長の攻撃を食らわずにいたロイエは、弓で攻撃し動きを止める。ロイエが、信長の動きを止めている間にグロウスは右から、ヴェスナーは左から攻める。

グロウスの右から左へ、左から右へ切り裂き敵の後ろに移動するスキル『ヴァーバルストライク』を発動させ信長にダメージを負わせ、直ぐに距離を取る。

ヴェスナーは、振り下ろし突き出すスキル『ハウンドクオーク』を発動させ、信長にダメージを負わせる。

しかし、2人のスキルとロイエの弓でダメージを与えたが、まだ3分の1しか減っていない。その後は、ダメージを負いながらも信長にもダメージを与えていく。

「くそっ！ さっきまでの雑魚モンスターとLv違いすぎるだろ！」

ヴェスナーがそう叫ぶ。だが、ヴェスナーの気持ちも分かる。落ち武者やスライムなどは1・2撃で倒す事が出来るほど弱いというのに今戦っている信長は、明らかにLvが違つと感じるほどに、弱点属性であるはずの斬属性での与えるダメージ量が違つていた。いくら、ボスモンスター設定でも、この強さはおかしい。たぶん、Lv10や20前後だと無理だと感じられる。何故なら、30を超えているはずのヴェスナーがいても厳しいのだから。

「もしかして、こいつ弱点属性違うんじゃない？」

ロイエがふと、そんな事を洩らす。なら、何が弱点なんだよと思いグロウスは一旦後ろに下がり、アイテム一覧を表示させワルサーP5を左腕に装備させ、アイテム一覧を閉じる。同じ貫通属性の弓が大してダメージを与えられていないんだ。意味の無い事だと判りつつもグロウスが出せる違う属性は貫通属性しかない。

そのまま、ワルサーP5を抜き信長に向かって撃つ。すると、今までのダメージ量が嘘の様に、信長のHPが一気に半分近くまで減る。その減り様に、グロウスは驚き叫んでしまう。

「何で、銃でこんなに減るんだよ！？ 弓も銃と同じ貫通属性だろ！？」

「グロウス、何言ってるの？ 確かに、弓にも貫通属性はあるけど、私が今装備している弓は斬属性よ！」

ロイエから知らされる情報にグロウスは知らなかったと思い驚く。だから、貫通属性じゃなかったから、弓でもダメージを与えられなかったのかと思う。でも、いくら弱点属性じゃないからといって、Lv30を超えるヴェスナーの攻撃があまり効いていなかったのはしっくりこない。グロウスは、後で聞いてみるかと考え再びアイテム一覧を開き、右腕に装備している打刀を外し、代わりにもう一丁あるワルサーP5を装備する。

ワルサーP5を二丁装備すると信長に向かって発砲する。グロウスが撃った18発中1発が信長に当たり、HPを残り3分の1に減らす。すると、突然信長の両腕が変形する。通常の大きさの4倍程に膨れ上がり、その腕はもう人の腕ではなく鬼のように赤くなり、爪も伸びていた。

そして、その大きな腕を引きずりながらロイエとヴェスナーに向か

い、2人を壁に吹き飛ばす。

「ぐあ!?!」

「きゃ!?!」

壁に吹き飛ばされた2人は、地面に倒れる。そして、2人の頭上に気絶状態を示す星が頭の上を回る。

「ロイエ!?! ヴェスナー!?!」

急な場面展開に、グロウスは何も出来ずにいた。そして、腕を変形させた信長は、グロウスへ向かってくる。向かってくる信長に向かって発砲するが変形した腕でガードされ、先程とは違って全弾命中するもダメージを与えられなかった。

そして、そのまま何も出来ずに接近を許してしまい信長の持つ刀の攻撃を食らってしまう。グロウスのHPは、刀の攻撃により3分の1まで減ってしまう。たったの一撃でこのダメージ。グロウスは、マジックポーチに入れてあるポーションを手に取り飲む。しかし、ポーション1個では1000しか回復しないため後、3個飲む。合計4個飲んだおかげで何とか安全ラインまでHPが回復する。

グロウスは、信長と距離を取り発砲する。今回は腕に防がれている部分以外にも銃弾が当たる。しかし、先程までと違いあまりHPは減らなかった。その減り方にもしかして、弱点が変わったのかかと思いきや素早くアイテム一覧から、右腕に打刀を装備させる。無事に装備に成功すると、左腕に装備させたままのワルサーP5で牽制し信長が刀を持つ右腕に打刀を振り下ろす。すると、やはり弱点属性が変わっていたのかHPが一気に0まで減った。そして、信長の右腕が切断され地面に落ちる。

信長は、切断された右腕をいつの間にか人の腕に戻っていた左腕で押さえ、殺気を漲らせグロウスを睨んでくる。

「私の邪魔をするでない！ 我は、この地を恐怖で支配し平和を齎す！」

などと信長は叫ぶ。すると、突然信長の前に、忍装束を纏った人間が現れ跪く。何！？ とグロウスは警戒するが、その人間はグロウスを警戒した様子も無く信長に話しかける。

「信長様。此処は、一旦『ディールクルム』へ戻り大勢を立て直すべきかと」

「光秀か……。貴様の言うとおりだな。汝、我と決着を着けたければ『ディールクルム』へ来るがいい！」

信長は、グロウスへそう叫ぶと左腕を再び変形させると洞窟の奥へと行き、壁を殴る。すると、洞窟が大きく揺れ洞窟の破片が落ちてくる。そして、信長に殴られた場所の壁が崩れ、奥へと続く道ができる。

そこを信長と光秀と言われた人間は進んでいき見えなくなった。グロウスは、信長達が見えなくなると、安堵の息を零し信長の右腕が落ちているところへと近づく。そして、右腕に握られている刀を右腕から外し入手する。

『千鳥を入手しました！』

## 第4話（後書き）

更新遅くなり申し訳御座いませぬ。風邪を拗らせてしまいまして、昨日まで寝ていた状態です。

しかし、漸く回復しましたので更新を再開したいと思えます。と言いたいのですが、別の連載の更新のため、次の更新は12月16日を予定しております。ご了承くださいませ。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書き下さい。

そして、拙い作品ではありますがポイントやお気に入り登録などをして頂けると作者の励みとなりますのでよろしければ、お願い致します。

第5話(前書き)

すみません、短いです

## 第5話

グロウスは入手した『千鳥<sup>ちどり</sup>』の能力を確認するのを後にして、気絶しているヴェスナーとロイエを起こすため、まずはヴェスナーへと近づく。

気絶は、軽くでも構わないから衝撃を与えれば起きる。だから、グロウスもヴェスナーの頭を叩く<sup>はた</sup>。

「くっ……うっ……！」

気絶から漸く目覚めたヴェスナーは、表情を歪ませ呻く。そして、両手を地面につきそれを支えにして立ち上がる。

「すまない。無事、信長を倒せたようだな。……ふう、まさか気絶攻撃とはな。油断した」

ヴェスナーは、立ち上がると周囲を見渡す。信長がいない事を確認すると、グロウスに謝り、自分が途中で気絶攻撃のため戦線離脱してしまった事を悔やみ恥ずかしげに顔を下に向ける。

グロウスは、相手によってはLvが高くても負ける事はあるだろうと思っっている。だから、ヴェスナーが気絶した事については別段気にしていない。その事をヴェスナーに言うと、苦笑しお礼を言ってくれる。

それに対して、グロウスはまだ気絶したままのロイエに向かいつつ「それに、」と続ける。

「まだ、信長は倒していないよ。HPが0になったと思ったら光秀と呼ばれている人間が登場して、あの先に一緒に消えて行った」

グロウスは、信長が殴って出来た道の方向を指す。信長の消えていった方向を指したグロウスは、地面にしゃがみ込みヴェスナーと同じようにロイエの頭を叩いた。

「……………」

ロイエも気絶から目覚めると、呻き声を上げて立ち上がる。立ち上がったロイエは、グロウスとヴェスナーに気絶してしまった事を謝ってきた。

それに、ヴェスナーは自分も気絶していたからと頭を掻きながら恥ずかしげに言った。

「ヴェスナーにも言ったけど、誰だつてやられる事はあるんだ。だから気にしなくて良いよ。それに、信長は倒せていないしね」

そうグロウスが言うと、ロイエはえっ！？ と驚きそれじゃ信長は何処にと周囲を確認しながら聞いてくる。そして、ロイエは信長が殴って出来た道を見た。グロウスは、ロイエがその道を見ていることを確認して言葉を発する。

「その先に、光秀とかいう人間と一緒に消えて行ったよ。ご丁寧に、『デールクルム』に來い！ っていう捨て台詞を残しながらね」

そう言つてグロウスは2人の様子を確認する。ヴェスナーは、やはりLvの高い装備を着けているおかげかあまり耐久値が減っていないみたいで防具の外見に、変化はなさそうだ。これなら、町に戻って修理してもらふ必要はないなと思いつきはロイエを見る。ロイエは、ヴェスナーと違って耐久値が減ってしまったているみたいで、巫女装束の服が所々破れていた。そして、その破れている隙間からロイエの素肌が覗き見えている。町に戻って修理する必要があるかもと顔

を赤くしてしまう。

その事に気づかれぬ様に、今度は自分の鎧を確認する。やはり、耐久値がかなり減っているようで鎧が崩れ穴が開いていたりしている。そして、武器も確認してみると、ワルサーP5は外見上問題はない。しかし、打刀は刃の所がかなり欠けておりよくこれで攻撃できていたなと思ってしまふほどの状態だった。

これは、一旦町に戻って修理とかしてもらった方が良いなと思いヴエスナー達にその事を伝える。

「OK！」

「そうね。私も防具修理したいわ」

ヴエスナー達も町に戻ることを了承してくれたので、町に戻ろうとするがグロウスはその前に、ボロボロになっている打刀とさつき手に入れた千鳥を入れ替えようとウィンドウを表示させる。そして、千鳥の能力を見る。

名称……千鳥

装備可能Lv……18

武器の種類……刀

攻撃力

AP + 250

防御力

DP + 0

魔法攻撃力

M AP + 0

魔法防御力

M DP + 0

耐久値……200 / 200

属性……なし

グロウスは、千鳥の能力値を見て喜び心の中でガッツポーズを取る。属性がないのは当たり前だ。魔力付与をしていないのだから。それでも今まで、使ってきた打刀の攻撃力が150だったから一気に1

00も攻撃力が上がる。しかも、この千鳥。装備可能Lvが18からになっている。16からの打刀と比べ、かなり能力値が良い。グロウスは、千鳥の能力の高さに喜び打刀と装備を入れ替える。装備を入れ替えたグロウスは、ヴェスナーとロイエと共に来た道を戻り町へと向かった。その途中で、信長との戦闘の途中で後でヴェスナーに聞こうとした事があることを思い出し、問いかける。

「ヴェスナー、そういえば信長の戦闘の時弱点じゃないとはいえヴェスナーの攻撃があまり効いていなかったけど、どうしてだ？」

「ん？ ああ、ボスの場合弱点を突かないとダメージが少なくなるんだよ。一応、30ぐらい離れていれば通常通りダメージを与えられるって噂だけだな」

「おい、それに気づいていながら何で言わなかったんだよ？」

「わりい、俺もてつきりロイエの使っている弓は貫通属性だと思ってたんだ。だから、信長の弱点は魔法だと思っただんだが皆魔法は治癒魔法以外覚えてなさそうだったからな」

ヴェスナーの言葉に、グロウスはもう少し自分達が使えるスキルや属性について把握しなければと思った。何故なら、信長との戦闘でその辺りの事を皆が把握していればもう少し楽に信長を倒せたんじゃないだろうかと思うからだ。

グロウスは、そう思いながらも『デイルクルム』って場所に向かいながらにでも話し合っって把握すれば良いだろうと後にする。そして、最初の町へと戻る道を時々落ち武者を倒しながら進む。

## 第5話（後書き）

読者の皆様、お気に入り登録してくださった皆様有難う御座います！  
頑張って可能ならば1日毎に、無理でも2・3日以内に更新できる  
ように頑張りますので、これからもよろしくお願いします。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に  
感想板にお書きください。

そして、拙い作品ではありますがポイントやお気に入り登録して頂  
けると作者の励みとなりますので、よろしければお願い致します。

## 第6話

最初の町に戻り、落ち武者などのドロップアイテムを売り払い耐久値の減った武器防具の修理を行った。そして、多少のポーションのアイテム補充をすると残り金額が、54ライアとなってしまった。その残り金額に、もう少し節約しないと考えると、やはり次のLvUP時には未だに取得していない治癒魔法『ヒール』を取得しようと、グロウスは思った。

ヴェスナーとロイエそれぞれの修理が終わると、信長が殴る事で出来た洞窟の道を進もうと来た道に戻る。その戻る道中で、グロウスは先程思ったそれぞれのLvや使っている武器の属性、取得スキルの把握をしないかと2人に相談する。

すると、2人ともが了承してくれたので言い出しっぺのグロウスから言い始める。

グロウス……Lv20。使用武器、刀と銃。属性は、刀が斬属性、銃が貫通属性。取得スキル、ヴァーバルストライク、エアガイスト、さみたれつき五月雨突き、ファイアバレット、アイスバレット、ウィンドバレット、ガイアバレット、3wayバレット。所属ギルドはなし。

ヴェスナー……Lv38。使用武器、大剣。属性は、斬属性。取得スキル、ハウンドクオーク、エアループ、三連星、ライグ・ループス、ヒール、キュアポイズン。所属ギルドは、渡り鳥。

ロイエ……Lv22。使用武器、弓。属性は、使用している弓によって斬属性、貫通属性。取得スキル、ファイアアロウ、アイスアロウ、ウィンドアロウ、ガイアアロウ、三連射、レインアロウ、ファイアレイン、アイスレイン、ウィンドウレイン、ガイアレイン、ヒール、ヒルミナ、キュアポイズン、キュアパラライズ。所属ギルド

はなし。

という事だった。グロウスのスキルの中で、回復スキルが無い事を知ると2人は呆れた表情を見せ、ため息を吐いた。

「グロウス、せめてヒールは覚えようぜ……」

「よくもまあ、ポジションだけでやってるわね」

と、言ってきた。それに、グロウスは何故か回復スキルを覚えていないのが駄目な事のように責める2人に、

「次のLVP時には、覚えるつもりだったんだよ！」

と叫んでしまう。そして、グロウスは歩みの速度を速め2人を置いて先に進んでいく。そのグロウスの様子に、ヴェスナーは悪かったよ！ ロイエは、拗ねなくても良いじゃないと言いながら、グロウスを追いかけるため早足に進んだ。

洞窟に向かって30分。最初に訪れた時に道を覚えていたため、信長と会った場所には前回よりも早く、最小限のエンカウトで着いた。

そして、3人は信長が逃げた先へと足を進めた。その先は、今までの入り組んだ道が嘘の様に一本道だった。時々、分かれ道があっても行き止まりという事が多発した。もしかしたら、元々あった道に信長が殴ってショートカットを作ったわけではなく、信長が殴って作った道なのかも知れないなどグロウスは歩きながら思った。そして、10分程、モンスターとのエンカウトもなく歩き続けると外の光が漏れる出口を見つける。

3人は、洞窟を抜けると外の景色に驚嘆する。洞窟を抜けた先は、

洞窟の向こう側と違い暗雲に空を覆われておらず、太陽が沈みかけており夕焼け空を演出していた。その綺麗な風景に、そういえばこんな綺麗な景色見たこと無いなと思う。視線の先には、沈みかけの太陽。右側には、オレンジ色に染まりかけの森。左側には、海。いや、遠いが城と思われる建物が建っていて陸地が更に奥に続いているから湖があった。

そんな景色を見つつグロウスは、昔はこんな風景も沢山存在していたんだろうな。人間の生活が便利になるにつれて、自然は減っていく。それは、本当に人間にとって良いことなんだろうかと時々考えてしまう。生活が便利になる事に、人間は生活の場所を自ら滅ぼしている気がするから良い事ではないのだろう。それに、気づいたのが政府が自然保護など言い出しているがその成果が出る前に滅ぶ気がする。

何故ならグロウスは、人間には便利な生活から抜け出す事は不可能だと感じている。だからこそ、自分たちの所為で失われつつある自然などを、写真として残したりゲームの中で再現しているのではないかと思う。その行為は、未来に生まれてくる子供たちの為など理由があるだろう。しかし、その一方で自分たちが死んだ後の事なんて関係ないと考えている人間もいるはずだ。そういう人間が存在する場合、沢山の人間が頑張っているようにもその頑張りは無駄に終わる。

守る行為には、耐え続けなければならないのに対して、壊す行為は一瞬で事は済むのだから。

グロウスは自分が出来る事は微々たるモノだろうけど、やれる事をやればいいのかと考え、草原を太陽を目指すように進む。今、確認できる城に向かうため、何処かに町や橋が無いかと周りを見渡す。草原を歩いていると、ゴブリンや落ち武者などとエンカウントするのだが洞窟の向こう側とのモンスターのLv差を感じる。向こう側なら、1撃。多くても2撃で倒す事が出来るのに対してこっちは、4撃。多くて5撃もダメージを与えなくてはならない。それに、あつ

ちの食らうダメージは50〜100ぐらいだったのに対して、こっちは300〜500も食らうようになっていた。これは、回避もちやんとやらないと拙いなと思いつつエンカウトしていた落ち武者集団の最後の一体を倒す。貰える経験値も、30前後から、100前後まで上がっていた。

落ち武者集団を倒したグロウス達は、何かをないかと思渡す、すると、太陽の右下付近に黒い影が見える。此処からだと思えぬが、黒い影の形は長方形だった。その形に、グロウス達は、町かも知れないと考えその影に向かって歩き出す。

影を見つけ更に10分。向かう途中で、1度だけゴブリンと落ち武者の混成集団とエンカウトしつつも倒して影だったものの前に立つ。影の正体は、やはり町の様で、入り口からでもNPCが歩いているのが見える。グロウス達は町に入ると、まずは中央にあるポータルで復活設定をこの町【カিশウマ】へと変更する。これにより、もしHPが0になったとしてもカিশウマで復活できる。

3人は、復活設定を変更すると何か情報を得られないかと思いいNPCに話しかけていく。

「幸村様のおかげで、魔王の軍もこの村には責めてこないわ〜」

「この村の南にある森【雫の森】には、どんな病気でも治ると云われていて水があるそうじゃ」

「幸村様の娘、静音様は大丈夫かしら。ここ数日ずっと寝込んでいるという話だけど」

「この村の北にあるのが、魔王の城じゃ。あそこに行くには、普段なら船なんじゃが魔王に全て壊されてのお〜。危険じゃが、雫の森の中にある地下へ続く道を通れば行けん事も無かつたはずじゃ」

「雫の森の地下へ続く道？ あそこなら危険だからって幸村様が入り口を施錠したから通れないわよ」

という様な話をNPCから聞いた。どうやら、信長は北にある城を

根城にしているみたいだ。そして、そこに向かうためには普段は船で簡単に行けるみたいだが、今はその船を信長に壊されているため村の南に存在する雫の森の中にある地下へ続く道を通る事でしょうか、行けないみたいだ。更に、今は此処の領主？ である幸村という人物が危険ということで入り口を施錠してしまっているみたいで、幸村なる人物に会わないといけなくなつた。

3人は、ポータルの更に奥に建っているこの村で1番でかい建物へと向かった。そして、勝手に入り口を潜り家の中へと入る。家の中に入ると、目の前に襖があり左右に続く通路が伸びている。まずは、目の前にある襖を開ける。そこには、誰も居らず奥に槍が立て掛けられているだけであつた。グロウス達は、その部屋を出ると、右へと進む。角を左折して、真っ直ぐに進み更に右折する。右折すると、直ぐに襖に仕切られた別の部屋があるのでそこに入っていく。

だが、残念ながらその部屋にも誰も居らずグロウス達は部屋の外に出て左奥に進んでいく。左に進み、角を左折する。すると、奥は行き止まりとなっており右側と左側にそれぞれ部屋がある。グロウス達は、まず右側を確認する。そこには使用人と思われる女性が着物を着て部屋の掃除をしていた。女性は、グロウス達を気にした様子もなく部屋の掃除を続ける。

グロウス達は、その部屋の襖を閉じると左側にある部屋を開ける。そこには、中央に布団が敷かれ布団から咳き込み額に冷やされたタオルが乗せられている、黒髪のまだ10歳ぐらいの女の子が眠っていた。そして、その横には兜は脱いでいるが鎧を来た30代ぐらいの顎鬚を生やした男性が、布団で眠っている女の子を心配そうな表情で見ている。

グロウス達は、何となく気まずい雰囲気を感じながらその男性に話しかける。

「すまないが、今私は忙しいのだ。話なら、また後日立ち寄ってくれ。ん？ おお！ 何だ、てっきり上杉かと思つたのぞ！ すまな

いなあ、旅人よ。私は、この村の領主、真田幸村。それで、私に何  
用だ？」

「北の城へ向かうため、雫の森にある地下へ続く入り口を開けても  
らいたいんですが」

「おお！ 信長を倒しに行くのか！ ならば！ ……と聞いたん  
だがすまない。そんな事をすれば、信長によつて施されたこの呪い  
が娘の命を奪つてしまうんだ。だが、この呪いを解く方法はある。  
君たちの向かう雫の森の奥に、聖なる水がある。それを、娘に飲ま  
せれば呪いを解く事が出来る。残念ながら、私は信長のこの呪いに  
よつて娘の近くを離れるわけには行かん。だから、代わりに聖なる  
水を汲んで来てくれないか？」

グロウスが代表して幸村に、用件を言うが娘の呪いを解くのに必要  
な聖なる水を汲んできてくれた代わりに鍵を開けるといふ話になり、  
グロウスは幸村の用件を飲み、幸村の代わりにグロウスは3人で聖  
なる水を汲みに行くため幸村の家を出た。

## 第6話（後書き）

家主の許可も無く、家に上がったら駄目だよ？

2日ぶりです。お待たせしました。

そういえば、昨日P S V i t aの発売日でしたね。小説家になろうを利用していらっしゃる方で、買った方はいるのだろうか？ ちなみに、私は買っていません。一応P 4 Gが出れば、買う予定ではありませんがね。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください

そして、拙い作品ではありませんがポイントやお気に入り登録していただけると作者の励みとなりますので、よろしければお願い致します

## 第7話

真田幸村の娘、静音に掛けられた呪いを解くため唯一の解く方法である【雫の森】の奥に存在する聖なる水を汲むため、グロウス達3人は森の入り口へとやってきていた。

入り口といっても、分かりやすく案内板が立て掛けられていたり、門が建てられていたりしている訳ではない。ただ、草原と森の境界線の前にいるだけだ。3人は、森の中にどんなモンスターが存在するか分からない。その為、それぞれアイテムや装備の最終確認をしていた。

グロウスは、マジックポーチにポーションとマナポを最大まで入れる。そして、右腕に千鳥を左腕にワルサーP5を装備している事を確認してヴェスナーとロイエの準備が終わるのを待つ。

皆の準備が終わると、3人はヴェスナー、グロウス、ロイエの順番に並び森の中へ入る。ヴェスナーが一番前なのは、Lvが高いということもあるが体力が多いという事で、何かあっても耐えてくれるだろうという安易な考えからである。次にグロウスなのは、近距離、遠距離と一応どちらでも行けるといいう事から2番目。最後に、ロイエなのは遠距離と回復などサポートに適しているからである。

「ファイアバレット!!」

森の中に入り直ぐにモンスターの集団とエンカウトする。根っこのような姿をして、その頭と思われる場所から一枚の葉っぱをつけているモンスター【マンドレイク】、次に緑の皮膚を持ち、耳が上向きに尖っているモンスター【ゴブリン】、中心部に牙を生やしその周りに花びらをつけているモンスター【人食い草】、グロウスは銃スキルの一つである弾に火属性の魔力を付与し火属性のダメージを与える『ファイアバレット』を【人食い草】に向かって放つ。そ

して、こちらに向かって攻撃してくる【ゴブリン】の棍棒による攻撃を右腕に持つ千鳥で受け止め、【ゴブリン】を左右に真っ二つに切り裂く。

グロウスが、2体のモンスターを相手にしている間にヴェスナーは大剣を振り回し周りを囲んでいる【マンドレイク】、【人食い草】、【ゴブリン】を一撃で屠っていく。ロイエは、グロウスと同じく弓スキルの一つで火属性の範囲攻撃『ファイアレイン』を放ち範囲内にいるモンスターにダメージを与えていく。

そして、1分も経たずに3人は余裕を持って、【マンドレイク】達を全滅させた。やはり、攻撃力の高いヴェスナーは基本的に一撃で葬れるし、グロウスは銃でダメージを与え、それでも近づいてくるモンスターは刀による攻撃が待っている。ロイエは、範囲攻撃から体力の減ったモンスターを一匹ずつ止めを刺す。

そんなモンスター達だが、経験値は100前後とグロウスはおいしく感じられるし、おそらくロイエもおいしいと感じられる数字ではないかと思う。それを証明するかの様に、ロイエの顔が笑っている。グロウスは、最後に確認した残り経験値なら後、2回か3回集団にエンカウントすればLvが上がるだろうと嬉しくなりながら森の奥へと進んでいく。

森に入り20分近く経った。その間にも8回ほどモンスターの集団にエンカウントした。4回目のエンカウントのモンスターを倒していると、グロウスの耳にシステム音声で、

「Lvが21へと上がりました！ アタックススキルポイント ASPが4追加されます！」

という声が聞こえた。その戦闘を終えるとグロウスは、早速ヴェスナーとロイエに一言言ってASPを使用する。もちろん、その時2人からはおめでとう！ という言葉を貰った。

PC名……グロウス Lv21 次のLvまで6028

HP 6328    MP 328    攻撃力 AP 401    防御力 DF 336    魔法攻撃力 MAP 0  
魔法防御力 MDF 78

取得済みスキル……ヴァーバルストライクLv5、エアガイストLv3、五月雨突きLv3、ファイアバレットLv3、アイスバレットLv2、ウィンドバレットLv2、ガイアバレットLv2、3wayバレットLv3、ヒールLv1、HP上昇Lv20、MP上昇Lv15、防御力上昇Lv12、刀上昇Lv14、銃上昇Lv10、錬金術Lv1、鍛冶技術Lv3、薬学Lv4、空中戦闘Lv1、水中戦闘Lv1、暗闇戦闘Lv1

所属ギルド……フリー  
装備……右手、千鳥。左手、ワルサーP5。頭、バルテスタ+2。体、バルコルポ+2。腕、バルアルム+2。足、バルクルース+2。アクセサリー、マジックポーチ(小)\*2、マジックポーチ(中)\*2。

ライア……54ライア

という感じになっていた。スキルLvが変わっていたのは、ヴァーバルストライクがLv5に、ファイアバレットがLv3にLvが上がっていた。そして、ASPを消費して、ヒールを覚え、防御力上昇を10から12に刀上昇を13から14へとLvを上げた。これで、少しはポーションの使用率は下がるはずと思いながら奥へと進んでいったのだった。

だが、20分も歩くのに未だに聖なる水があると言われる場所に着かない。本当に近づいているのか不安に思っていると、また【マンドレイク】、【人食い草】、【ゴブリン】、そして蜂を5倍ぐらい大きくしたモンスター【ビククワスプ】とエンカウントする。

【ビククワスプ】が、2匹グロウスへと向かってやってくる。グロウスも、【ビククワスプ】へ向かって走り出し、前後に飛ぶ前の【ビククワスプ】を切り上げて攻撃しつつ下を走り抜ける。走り抜け

るとグロウスは、直ぐに後ろに方向転換し千鳥で攻撃した【ビックワスプ】をワルサーP5で2発撃ち抜く。それで、1匹はHPが0となり光の粒子となり消滅した。

残りの一匹は、グロウスは、【ビックワスプ】を飛び越えるようにジャンプして上から一振り。着地して振り向いた時に切り裂く。これにより、スキル『エアガイスト』と判定され通常よりダメージを与え2匹目を倒す事に成功する。

グロウスは、【ビックワスプ】を倒すと【ゴブリン】に接近され倒すのに少し苦労している様に見えるロイエを助けるべくそちらに走り出す。

ロイエに向かいながら、グロウスはワルサーP5の照準を【ゴブリン】の後姿に定め攻撃する。しかし、走りながらの為照準が定まらず6発の内2発しか当たらなかった。そして、ロイエを攻撃していた【ゴブリン】は攻撃の邪魔をするグロウスに怒ったのかロイエに対する攻撃を中断し、グロウスに向かってくる。

向かってきているのを見て、グロウスは心の中でよしっ！ と思いいHPが3分の1となっている【ゴブリン】に止めを刺すべく千鳥を振り下ろす。

そして、エンカウトしたモンスター達を全滅させたグロウス達は、奥を目指して先を進む。更に10分歩き続け、漸く目的の場所と思わしき広い場所へと出る。そこは、中心に水が湧いておりその水を飲む小鳥たちの姿が見える。3人は、漸く着いたと思いい安心した表情を見せグロウスは代表してその水を汲みに行く。

『聖なる水を手に入れました！』

グロウスは、そのシステムメッセージを確認すると後は町に戻るだけかと安心し、その事を報せるためヴェスナーとロイエに親指を立ててOKのサインを出す。すると、ヴェスナー達も安心したのか笑顔を零す。グロウスは、2人の側に向かおうと聖なる水から離れて

いく。

「……………!」

2人に向かっていると、後ろから急に何かが進るのが見える。それが、見えたのと同時にヴェスナーとロイエの姿が吹き飛び、2人のHPが0になるのを確認する。はっ? と起きた事をグロウスは理解できぬまま千鳥を構えながら後ろを振り向く。そこには、聖なる水の上に立つ、ドラゴンの顔をしていて2本角。体は鹿で馬の蹄を持つている。体毛は黒く、雷の様なモノがそいつの体の周りを帯電しているのが見える。おそらく、こいつの周りに帯電している雷の様なモノがヴェスナー達のHPを0にした正体だと判断する。

グロウスは、そのモンスターの名前を確認するがそいつの頭の上に表示される名前は、【???】となっていて名前が分からない。なので、仕方なく姿が麒麟に見えるから【麒麟】と呼ぶ事にしようと思った。そして、グロウスは目の前の【麒麟】に勝てる気がせず、絶望に支配されていた。たった一撃である3人の中で一番HPがあるはずのヴェスナーを倒す敵をグロウス1人で倒せるわけがない。さて、逃げるかと考えていると【麒麟】が雷をこちらに放ってきた。グロウスは、咄嗟に千鳥を振ってしまった。焦ってしまったとはいえ、何をやってるんだと心の中で叫んでいると、【麒麟】によって放たれた雷は左右にわかれ拡散した。

「……………?」

拡散した雷に、何故? と状況についていけないグロウスに向かって再び雷が放たれる。そして、もしかしたらと思いき千鳥を振るつた。すると、再び雷は左右にわかれ拡散する。

『千鳥が、雷切へと昇華しました!』

雷が切れると分かると、グロウスはこれならいける！ と【麒麟】へ攻撃を仕掛けようと考えているときなりシステム音声が聞こえ、そんな事を言ってきた。頭に？ マークを一杯浮かばせながらまずは【麒麟】を倒す事だと雷に気をつけながら走り出そうとする。

しかし、【麒麟】も2回も自分の攻撃を防がれた為か今度は、グロウスの周りを覆うように雷を発生させた。それを見たグロウスは、立ち止まり雷切を振るう。だが、あまりの数の多さに全ては切れずグロウスは雷に撃たれた。

## 第7話（後書き）

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に感想板にお書きください。

そして、拙い作品ではありますがポイントやお気に入り登録して頂けると作者の励みとなりますので、よろしければお願い致します。

## 第8話

【麒麟】の雷攻撃によりHPを0にされ、復活設定をしていた町【カイシウマ】のポータルの前に戻ってきたグロウス。

先に戻ってきているはずのヴェスナーとロイエを見つけようと辺りを見渡す。探している2人は、グロウスの前5メートル程離れた場所に立っていた。2人は、一撃で倒れてしまった事が恥ずかしいのだろう気まずそうな顔をしながらこちらに歩いてくる。

2人は、グロウスの前にやってくるで一撃で倒れた事を謝り戻ってくるのが遅かったグロウスに、自分たちを倒したモンスターの事を尋ねてくる。

「残念ながら、名前さえ殆どの事が分からんよ。ただ、雷の様な攻撃は刀で切ることは出来たから武器で防ぐ事は出来るかもしれない」  
それから、グロウスは自分の武器である『千鳥』が『雷切』へと名前が変わった事を思い出す。その事を、2人に言い武器の名称が変わったという話は他にあるのかと聞いてみた。

「いや、無かったはずだがな。掲示板で、名称が変わる武器の情報は見た事ないしな」

「うーん？ 私もないなあ」

2人とも、首を捻りながら記憶を探ってくれるがやはり武器の名称が変わるといふ事は、あまり無いようだった。

「それで、その『雷切』？ 能力値に変化はあるのか？」

ヴェスナーにそう言われ、アイテムウィンドウを開き確認していな

かった『雷切』の能力値を確認する。

名称……雷切  
装備可能Lv……18  
武器の種類……刀  
攻撃力  
AP + 350  
防御力  
DP + 0  
魔法攻撃力  
MAP + 150  
魔法防御力  
MDP + 0  
耐久値……299 / 300  
属性……風

そこに表示されていた能力値は、装備可能Lvからは信じられない能力値が表示されていた。攻撃力が、『千鳥』から更に100も上がり350に上昇しているし、更に魔法攻撃力が150もある。通常の武器ならば、攻撃力なら攻撃力。魔法攻撃力なら魔法攻撃力のどちらかしか、存在しない。

例えば、グロウスの使っている刀という武器は、攻撃力に数値があり魔法攻撃力に数値が0なのが当たり前だ。一応、魔力付与を使つて属性を持たせれば魔法攻撃力も、1〜30にする事は可能だが……。

だけど、この『雷切』という刀は攻撃力が350、魔法攻撃力が150という数値だ。魔力付与を使ったとしてもかなりおかしい能力値だと伺える。

その能力値を2人に伝えると、はっ？ とグロウスの言葉を上手く聞き取れなかったのか頭が理解しなくなかったのかグロウスに聞き返してきた。

「だから！ 攻撃力350、魔法攻撃力150、属性が風だよ！」  
「何だよ、その物理耐性持ち、魔法耐性持ち。どちらでもいけるっ

て刀は！」

「もしかして、ユニークウェポン？」

ヴェスナーの、耐性持ちどちらでもいけるって話は、敵を攻撃すれば攻撃力と魔法攻撃力を合わせてダメージ計算される。だから『雷切』の場合、耐性を持っていない敵なら500からダメージ計算され、物理耐性持ちなら、150からダメージ計算、魔法耐性なら350からダメージ計算がされるということである。

そして、ロイエの言うユニークウェポンとは、通常の武器とは違って能力値が高く基本的に世界に1本しか存在しない武器の事である。しかしだ、ユニークウェポンなら能力値が低い気がするのはグロウスだけかと思つて頭の中で首を捻っていると、ヴェスナーも同じ気持ちだつたらしくロイエに反論した。

「ユニークウェポンなら、もつと高いだろ？ 掲示板に公開している情報だと、未強化でも、700ぐらいあるって話だしよ」

「それは、攻撃力が魔法攻撃力のみだからじゃないの？ 『雷切』は合計で500よ。これで、ユニークウェポンじゃなかったらセコイじゃないのよ！」

と2人で盛り上がってるのを、グロウスは見ながらまあユニークウェポンなら嬉しいけど、別にそこまで拘りはないしなあと思いつつそろそろ、幸村の所に行かないかと2人に声を掛ける。

「グロウスはどっちだと思う！？ ユニーク？ ユニークじゃない？」

「えっ？ いやあ〜正直俺はどっちでも良いんだけど……」

グロウスの話そっちのけでロイエは、ユニークウェポンかどうかと聞いてきた。そして、グロウスが曖昧な返事を言つと、ロイエはガ

シッ！ とグロウスの両肩を掴みハッキリしなさいと揺らしてくる。その様子をヴェスナーは、にやついた顔で助ける様子もなく見守っていた。そんなヴェスナーに対してグロウスは、にやついてないで助けるよと心の中で叫びながら、ロイエに対し何とか答える。

「ゆっ、ユニークだと、思う！」

グロウスの答えに何を納得しているのか分からないが、うんうんと笑顔で頷くロイエを余所にグロウスは、膝に手をつきながら肩を揺らされて乱れた息を整えていた。そのやり取りを見ていたヴェスナーが、

「それじゃ、幸村の所に行きますか！」

と言うと、ロイエもそうねと答えヴェスナーの後ろについて行く。そんなヴェスナーとロイエに、グロウスはお前らな！ と恨みの籠った視線を送った。そして、息を整え終わると急いで2人を追いかけた。

グロウス達3人は、再び幸村の屋敷にやってきていた。そして、奥で寝込んでいる静音の部屋へと入りそこで心配そうに静音を見つめる幸村へと声を掛ける。

「おお！ 旅の皆様。どうされました？」

幸村に問われ、グロウスはアイテムウィンドウを開きそこに収納されている『聖なる水』を選択して右手に具現化させる。具現化させた『聖なる水』を幸村へと差し出す。

「これは、もはや！ 皆様、本当に有難う御座います！ これで娘

も助かる事でしょう！」

『聖なる水』をグロウスの手から受け取った幸村は、そう言って眠っている静音の頭を支え口元に『聖なる水』が入った瓶を持っていく。

持っていくと、静音がゆっくりと飲み始めた。そして、『聖なる水』を飲み終わると、飲む前とは違って安らいだ表情を浮かべ静音は再び眠りに入るのだった。

その静音の安らいだ表情を見て、幸村も安堵の息を吐く。そして、グロウス達へと体の向きを変え、正座のまま額を畳につけるのだった。

「本当に有難う御座いました！　これで娘は助かります！　お礼は後程させて頂くとして、『雫の森』にある地下へ続く入り口でしたね？」

それにグロウスは、はいと答える。答えると、幸村は立ち上がり部屋の外へ向かいながら言う。

「では、私が案内致しますよう。皆様、私は準備が御座いますので屋敷の外でお待ちください」

## 第8話（後書き）

後、10日で2011年も終わりですね。正直、もう終わりかぁ〜  
早いなあ〜って気持ちですね。

来年も書き続けて、充実した日々を送りたいと思います。  
それでは皆様、お体にお気をつけて

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に  
感想板にお書きください。

そして、拙い作品ではありますがポイントやお気に入り登録などし  
て頂けると作者の励みとなりますので、よろしければお願い致しま  
す。

第9話（前書き）

2011/12/24 加筆しました。

## 第9話

幸村の準備が終わるまで、グロウス達は外で待っていた。グロウスは、やっと信長と再び戦える事を楽しみにしていた。正直なところ、戦い方に慣れてきたという事もあるのだろうが雑魚モンスターとの戦闘で油断すれば倒される。という様な事は、数回戦って動きが分かれば殆ど無い。そのため、あまり雑魚モンスターとの戦闘では、緊張した戦闘を行えない。

それぐらい、敵のAIは弱いしこちらが与えるダメージに比べて敵が与えてくるダメージは低い気がする。だから、『雫の森』で出会った【麒麟】との戦闘は心が躍った。おそらく、あの【麒麟】は何度やろうが油断すれば即倒されてしまうだろうと、ほぼ一瞬の戦闘で感じた。

グロウスは、あれほどの理不尽な強さはごめんだが是非雑魚モンスターの能力値を強化してもらってももう少し緊張した戦闘を楽しみたいので『ワールドクリエイイト?』にメッセージを送ってみようと考えた。

そんな事を考えながら屋敷の外で待っていると、漸く人が出てきた。出てきた人物は、色は赤という派手な色だが信長と同じ鎧兜着けており背中には、2本の槍をクロスさせて背負っていた。

「では、行こうか。旅人の皆さん！」

そう言っただけ幸村は先導するように、村の外に向かって歩き出した。何だが、幸村の装備が重装備だなど思いつつも用心に用心を重ねているだけだろうかと、グロウスは思った。村の領主なのだから、そう簡単に殺られる訳にはいかない。だから、どんなに近くても危険のある場所へ向かう場合は装備を徹底的に行う。それでも、0になる事は無いだろうかと低く出来る。安全対策に、安心などない事を幸

村は行動で示していた。

「やたらと、重装備だが幸村さんは俺らが守らないとな」

どうやら、重装備と思っていたのはグロウスだけではなく後の2人も思っていたみたいだ。そして、ヴェスナーが言った通り幸村を守るのは自分たちの役目だ。いくら、ゲームの中のキャラクターとはいえ死なれるのは後味が悪い。ロイエも、幸村を守ることにについて、そうねと言って頷いている。

勝手に、地下の入り口まで幸村の護衛任務とした3人は気を引き締めて幸村の後ろについて行く。

「此処だ」

そう言つて、幸村は目の前にある鎖で施錠された扉を指差す。地下へ続く扉は、『雫の森』に入って、約3分ほど歩いた場所にあった。場所を指差した幸村は、扉へと近づき鎖を留めている鍵穴に鍵を挿し右に回す。すると、鍵の外れた鎖は扉とぶつかりガタン！ という音を周囲に響かせて草の上へと落ちる。そして、草の上に落ちると光の粒子を伴って消えていく。

「これで、地下へと行けるぞ」

鎖が外れ、今まで縛っていた重りが無くなった為か地下へ続く扉は誰かを招き入れられる事を喜んでいるかの様に、扉は大きく開いていた。

「有難う御座いました！」

「何を言う？ 信長を倒しに行くのである。私もついて行くぞ。戦える力があるというのに、何もかも旅人達に任せるわけにはゆ

くまい」

グロウス達が、扉を開けてくれたお礼を言うと幸村は信長の所まで行くと言った。グロウス達は、てっきり扉を開けたら村へと戻っていくと思っていたので驚いてしまった。驚いているグロウス達を尻目に地下へ続く階段を降りていく。

グロウス達も、幸村に急かされる様に地下へ続く階段を降りる。降りた先は、洞窟の様で水で濡れた岩壁を、岩壁に立て掛けられている篝火が照らしていた。

先へ進もうとすると幸村は案内の時とは違って、グロウス達について来るように後ろに控えていた。その事に、ふうとグロウスはため息を零しながら岩壁によって限られた視界の中、モンスターに気を配りながら先を進んでいく。

洞窟の入り組んだ道を進んでいくと、2体のモンスターがこちらに歩いてくるのを見つけた。

1体目のモンスターは、定番になりつつある【落ち武者】だった。そして2体目のモンスターは、下半身は蛇の形をしており上半身は美しい女性の姿で2つの形の良い膨らみを、恥ずかしげも無く見せている【ラミア】と表示されていた。

グロウスは、一瞬その【ラミア】の姿に顔を赤くしながらもその2つの膨らみに見惚れていた。

あんな形の良いものなんて、現実じゃないだろうなあ〜

「何、見惚れているのよ!」

ロイエが何に怒っているのか。膨らみに頭の中を支配されているグロウスは理解できていなかった。すると、急に頭を叩かれる。叩かれた方向を見ると、ヴェスナーがロイエに頭を叩かれている所だっ

た。

「いきなり、何するんだよ!？」

折角、何か良い思いをしていた所をロイエに頭を叩かれたのだ。理由の分からない行為にグロウスは、良い思いを邪魔された怒りを大半に理由を問い詰める。グロウスの視界では、ヴェスナーもそうだし、そうだし、と言う様にロイエの事を見つめていた。

「魅了よ!……全く、これだから男って奴は綺麗ならモンスターでも見惚れるのね」

魅了。それは状態異常の一種で、魅了を食らうと意識が別の事に支配される。その為、戦闘中では無防備を晒す事になってしまう。何かしらの衝撃を与えられると意識は戻ってくるが危険なものに変わりは無い。これを事前に防ぐには、『魅了のお守り』を身に付けておくしかない。

グロウスは、魅了を回復させてくれた事のお礼を言おうと思ったたらロイエが最後に要らぬ事を言った。

「それ、関係ないだろ! 大体今のは、魅了の所為だろ! それにいくら綺麗でもモンスターで見惚れる様な事はねえ!」

グロウスは、そうロイエに叫んだ。だが、グロウスの視界に映るヴェスナーは何故か後ろに向き直り頭に手をやっていた。グロウスは、ヴェスナーのその行動にえっ? その動きはどういうことだ? と思ってしまった。

「はいはい……モンスターじゃなければ結局見惚れるんじゃないの」

そうロイエが呆れた声を出しながら言った。そして、直ぐにそろそろ戦闘に移りましょうと示すかのように弓を構え、【ラミア】の頭部に向けて弓矢を射った。

その攻撃を境に、両者は戦闘へと移る。ロイエは、そのまま【ラミア】を弓矢で攻撃し続ける。グロウスは、ロイエの射線を汚さないように【落ち武者】へと走り出す。ヴェスナーは戦闘を2人に任せ幸村の護衛を勤める。

幸村が先に進むのに邪魔になっている【ラミア】に攻撃をしている横をグロウスは駆け抜け、【落ち武者】に上段から雷切を振り下ろしダメージを与える。そして、振り下ろしきると直ぐに切り返し攻撃をする。

先の2撃により【落ち武者】のHPが後一撃で0となるため、更に追撃しようとグロウスは雷切を振ろうとすると、後ろからグロウスの顔右横ギリギリの所を弓矢が通過し【落ち武者】の頭に当たる。その一撃によりHPが0になった【落ち武者】は後ろに倒れ、消滅する。

グロウスは、消滅するのを確認するとロイエにあぶねえだろと抗議しようとして後ろに振り返る。

「ロイエ！ あぶねえだろ！」

「別に当たってないんだから良いじゃない」

「当たった、当たってないの問題じゃないっての！ いきなり後ろから黙って撃つんじゃないわねえ！ ビビるだろうが！」

「はいはい、悪かったわよ。次からは、一声掛けるわ、ビビりさん」

グロウスは、ロイエのその形だけ謝ったのが分かる態度に声を失う。別に、ロイエを怒らすような事はしていないはずだ。だから、何故いきなりこんな態度を取るのか訳が分からない。グロウスが、言葉を失って立ち止まっているのも気にせずロイエは先へと進んでいく。

その態度に、グロウスは何なんだよと思ひ答えを求めるようにヴェスナーへと振り返る。振り返った先のヴェスナーは、グロウスを見ると分からんと言う様に苦笑しながら頭を横に傾げ両手の手の平を上へと開く。そして、先へ行ったロイエと幸村を追いかけるようにグロウスの横を通り過ぎる。

「詳しい事は分からんが、お前の何かの態度が気に食わなかったんじゃないねえの？」

通り過ぎる時、その言葉を言い残して。

## 第9話（後書き）

遂に、遂に！ お気に入り登録数が10人を超えました！  
有難う御座います！ これからも、どうかよろしくお願いします。

感想・誤字脱字の報告・質問などお待ちしております。お気軽に  
感想板にお書きください。

そして、拙い作品ではありますが評価やお気に入り登録などをして  
頂けると作者の励みとなりますので、よろしければお願い致します。

## 第10話（前書き）

申し訳御座いませんが、2011/12/24に第9話を加筆しました。その加筆した部分を読まれていない方は先にそちらをお読みください。多少、置いてけぼり感を感じるかもしれませんので。

## 第10話

グロウスは、先へ行くヴェスナー達に追いつき一緒に進む。ロイエと【ラミア】の魅了からのやり取りで、何か気に障る事をグロウスはしてしまつたらしいが思い当る節はない。その為、ロイエの機嫌を戻す事が出来ずに気まずい雰囲気のまま洞窟を歩き続ける。

グロウスは、どのやり取りがいけなかったのか思い出そうと自分の行動を振り返る。悪い所があるのなら、直さないといけないと思うし何より此れからも長い間パーティーを組みそうな気のする相手とずっと気まずいままなんて、嫌じゃないか。

だから、グロウスは自分の取った行動を思い出しているのだが何が原因か分からない。原因といえそうな事柄は、【ラミア】の魅了に掛かつて見惚れていた事だが、そんな訳がない。いくらなんでも、強制的に見惚れさせられていた事を怒るわけがない、もしそうだとしたら理不尽すぎる。

グロウスは、原因を探りながらもエンカウントするモンスター達を倒していく。戦闘中は、ちゃんと援護とかしてくれるが戦闘が終われば我先にと先へと進んでいくロイエの後姿を見ながら、はあとため息を吐く。

しかも、ヴェスナーとは何故か普通に喋っている。本当に何が何やら訳がわからない。グロウスは、自分の行動を思い出そうと頭を捻り続ける。

頭を捻り続け30分。その間もエンカウントする敵は倒しつつ、ロイエの機嫌が悪い原因を思い出そうと続けていたがやはり思い当たる節が無く、自分が原因ではないのでは？ と思うようになっていた。グロウスは気づけば洞窟を抜けようとしていた。

グロウス達は上へと続く階段を上っていき、目の前の広がる景色を観察する。洞窟を抜けた先も森だった。グロウスは、一瞬間違つて『栗の森』に戻ってきてしまったのではと思つてしまつたがそれは

間違いだった。『雫の森』の雰囲気は、森林浴をしたくなるほどのんびりとした感じなのに対し、こちらの森は周囲から殺気を感じるまるで、油断すれば命はないぞと忠告するかのよう。

そんな森なのに、ロイエは気にした様子もなく前へと進む。そしてロイエについて行くように幸村も足を進める。唯一、ヴェスナーだけが厳しい表情を見せながらグロウスの方を見ていた。

「気をつけた方が良い。たぶん、既に俺たちの事気づかれてる。もしかしたら、一斉に襲われるかもしれない」

「分かった。なら、その事をロイエにも……」  
「分かってる」

ヴェスナーは、そう言う就先へ進むロイエに向かって走り出す。ロイエに追いつくと声を掛けている。声を掛けられたロイエは、一度グロウスの方を向くと直ぐに前に向き直り更に歩く速度を上げた。ヴェスナーは、そんなロイエを見ると両肩を竦め歩き出す。

一番後ろをグロウスが10分程歩いていると、急にヴェスナー達が止まった。どうしたんだと思いいヴェスナーの隣まで歩き尋ねる。

「どうしたんだ、急に？」

グロウスが尋ねると、ヴェスナーは背負っていた大剣を抜き構えて前を見ると言うかのように、顎を突き出し示す。グロウスは、示されるまま前を見てヴェスナーと同じく雷切を構える。

前を見たグロウスの視界に映ったのは、森の出入り口から見える平原を背景に佇む2体の黒い人影だった。ただのNPCとも限らないだろうが、場所的に可能性はかなり低い。何より、その黒い人影の立ち方が既に定番モンスターになりつつある【落ち武者】に似ているのだから。

相手の出方を伺っていると、黒い人影はこちらに向かって走り出し

た。そして、近づいてきて姿がハッキリと見える。黒い人影の正体は、やはり【落ち武者】で間違いなかった。

【落ち武者】がこちらに向かつて走り出すと同時に周りがざわめく。その感じにグロウスは、全員に向かつて叫ぶ。

「嫌な予感がする！ さつさと前にいる【落ち武者】を倒して広い場所へ出るんだ！ いけえ！！」

グロウスがそう叫ぶ前に、皆嫌な予感でもしていたのだろうグロウスを置いて【落ち武者】に攻撃を始めていた。10秒もせずに【落ち武者】2体を倒すと4人は平原へと飛び出す。

飛び出し、自分たちが今まで居た場所を振り返ると森の出入り口は木の枝の様なモノがクネクネと伸びていて、元に戻るうとする所だった。伸びていた枝が元に戻り、森の出入り口になったと思っただけ立っていた木が何本も一斉に赤い目をこちらへと向けてきた。

「おいおい、もしかして俺たちが今まで歩いてきた道に生えていた木が全部モンスターだったってオチはないだろうな？」

ヴェスナーが大剣を構えながら、呆れた声でそう言った。ヴェスナーがそう言った気持ちも分からなくもない。何故なら、グロウスの視界に映る木が全て赤い目を光らせながらこちらを見ているのだから。そして、敵が襲い掛かってくる。

グロウスは、【ウッドデビル】という敵の名称を見つつ敵へと突っ込んで行く幸村を視界の端に映す。NPCの性さがだろうか、敵を確認すると攻撃を始めるのは。それとも、幸村の性なのかと考える。そしてグロウスは、この数に精神的に辟易しながら雄叫びを上げながら攻撃を続ける幸村に続くように【ウッドデビル】の群れに突っ込んでいく。

【ウッドデビル】の速度は正直遅い。数体なら、ソロでも攻撃を食

らわずに倒す事は出来そうだが、今回は視界一面を覆うような【ウッドデビル】の数である。伸びてくる枝による攻撃を雷切で切り落としたり、避けたりするがあまりの数の多さに防ぎきれずダメージを受けてしまう。更に、そのダメージも一発200ぐらい食らってしまう。グロウスは、数の多さにダメージのデカイ雷切で倒していかうと接近戦を挑んでいたがこのダメージでは回復も追いつかない。これでは、味方に迷惑を掛けてしまうと判断しグロウスは、襲い掛かる枝だけを切り落として【ウッドデビル】の群れの中から外へと飛び出す。

「ロイエ！ 悪いが、武器を切り替える。その間のフォローを頼む！」

「……。わ、かったわよ！」

グロウスが、フォローを頼むとロイエは何か言いたそうな表情を見せたが引き受けてくれる。その表情に、グロウスは全く何なんだよ、ロイエに後でその態度の理由を直接聞くかと思いつつ、右腕の装備を雷切からワルサーP5に付け替える。そして、左腕もワルサーP5を装備する。

「助かった！ ありがとう！」

ロイエに、フォローのお礼を言うとグロウスは【ウッドデビル】に向かってワルサーP5を撃っていく。8発全弾撃ちつくすとグロウスはマガジンを取り出し、直ぐに取り出したマガジンを挿入し直す。そして、また全弾撃ちつくす。時々、『ファイアバレット』、『アイズバレット』、『ウィンドバレット』、『ガイアバレット』、『3wayバレット』などのスキルを使っていく。

その中で、ダメージの高かった『ウィンドバレット』、『3wayバレット』を通常射撃の中に組み込んでいく。

「ウインドバレット！」

戦闘を開始して20分弱。最後の【ウツドデビル】の攻撃をワルサーIP5で撃ち抜き、すぐに『ウインドバレット』で止めを刺す。消滅を確認したグロウスは、両腕のワルサーIP5を外し右腕に雷切を装備する。そして、HPの減っている自分と幸村に対して回復スキル『ヒール』を掛ける。他の2人もHPは減っているには減っていたがそれぞれ回復を行っていた。

「はあ。全部ではなかったみたいだけど、多すぎだつてえの！」

あまりの敵の多さに、グロウスは誰に言うまでもなく叫びストレスを発散する。何事にも、一度で行うのに限度がある。その限度を超えるとストレスしか溜まらない。それは、ストレス発散にも使えそうな戦闘でも同じだとグロウスは思った。そして、グロウスの叫びに誰の賛同を得られないのに気づくとグロウスは回りを見渡す。

グロウスは戦闘の途中から、近距離から遠距離に変更していたため息は比較的整っているが、ヴェスナーは息が上がっていて膝に手をつけている。その様子から息を整えるのもう少し時間が掛かりそうだ。そして、ロイエも弓の弦を引き続けていたために腕に疲労が蓄積しているのかダランと腕を垂らしている。こちらも、喋る気力はなさそうだ。だが、あの態度から気力があっても喋らないんだろぅがなとその姿を見つつ思う。最後の1人幸村は、NPCのはずなのに息も上がっているようで、平原に寝転がっている。

グロウスも多少は、銃の引き金を引き続けていたので指先が感覚が麻痺しかかっているような違和感を感じるが、他の皆のように当分戦闘は不可能という状態じゃないため、皆の姿を見て何だが場違いな気持ちになってしまった。

場違いな気をする自分の気持ちを誤魔化すように、グロウスは皆が

回復するまで、周囲の警戒を続けた。

## 第11話

大量の【ウッドデビル】を無事倒した影響で、ヴェスナーとロイエのダウンが漸く回復して、4人は信長が待っている『デイルクルム』という場所を目指す。

『デイルクルム』を目指しながら、グロウスは敵の本拠地に向かっていているのだから、もしかしてまた【ウッドデビル】の様に大量のモンスターと戦う事になるのではないかと思い、少し憂鬱になる。何で、戦闘回数は少ないのに一回の戦闘にエンカウトする敵が多いんだこの世界はと思う。

他の世界では逆だというのに、今更だがめんどくさい世界だよな。こういう所も、この世界が不人気の理由なんだろうなと思った。Lvを上げるにも、エンカウト数が少ない上に、一度にエンカウトするモンスター数も少なければ、そりゃ誰もこの世界に来ないよな。

グロウスはやっと、この世界が不人気の理由を理解しつつ歩いていると城下町と思われる場所へ着いた。

この城下町が、『デイルクルム』なのか分からないがアイテム補充を行えると思いグロウス達は入っていく。

城下町に入ると、突然後ろの城門から閉じるような音がした。そのいきなりの事に4人は驚き、後ろを振り向く。振り向くと、やはり城門が閉じられており3人は、城門へと近づき調べる。

いきなり閉じた城門に何だ！？ と思いつつも城門を開ける方法を探すため周囲を手当たり次第調べていく。

「ちっ！」

どれだけ探そうとも城門を開ける方法を見つけないことは出来なかった。それでも、調べて続けていると後ろから突然声を掛けられ、そ

ちらに振り向いた。

「ようこそ、皆様。我が主、信長様が治める地『ディールクルム』へ！」

振り向いた先には、忍装束を纏った人間がこちらに向かつてお辞儀をしていた。そして、そのお辞儀を終えた人間はこちらを睨み言葉を続ける。

グロウスは、忍装束の姿を見て洞窟で信長に光秀と呼ばれていたのを思い出しヴェスナー達に敵だと教え武器を構える。

グロウスは、光秀の強さがどれほどなのか分からない。武器を構えつつ緊張した雰囲気周囲に漂わせる。そのグロウスの雰囲気に基づいたヴェスナーとロイエがグロウスの緊張する気持ちに伝播するかのように、2人も緊張した面持ちを表す。

「ですが、信長様の支配する地に貴方は不要な存在です。そして信長様の手を態々煩わせる必要はありません。私、明智光秀が御相手致そう！」

そう言うと、光秀は両手に短剣を持ちこちらに走って来る。光秀が、攻撃を仕掛けてくると、周囲の建物から光秀と同じく忍装束を纏った人間が10人現れる。

敵が現れると、今まで黙ってついて来ていた幸村が急に喋り出す。

「すまないが、此処は君たちに任せた！ 私は信長を倒しに行く！」

そう言った幸村は、グロウス達を振り返ることもなく光秀の横を走り去っていく。光秀も幸村をチラッと見るだけで特に足止めをする事もなくこちらへの攻撃を続ける。

グロウスは、走り去っていく幸村を敵の攻撃を捌きながら目を見開

きながら見つめる。何故こんな時に一人で行動するんだと訳もわからず。

だから、グロウスは幸村を止めようと幸村へと近づこうとするがその途中で【忍者】達が攻撃を仕掛けてくるために、その場に足止めされる。

足止めされ、仕方なくまずは【忍者】と【明智光秀】を倒してから幸村を追い掛けるまでだと決めると【忍者】を先に倒していく。

剣や槍で攻撃してくる【忍者】達は、雷切で捌いたり受け止めたり避けたりしながら地道に攻撃を繰り返す。そして、何体か手裏剣で離れて攻撃してくる鬱陶しい【忍者】にはロイエに指示を出して倒す。手裏剣で攻撃してくる【忍者】を倒す間、グロウスはロイエに攻撃を仕掛けようとする敵から守りつつ倒していく。そうやって、5分程で10体の【忍者】は全滅し後は【明智光秀】だけとなる。

光秀と攻防を繰り返していたヴェスナーへと近寄る。近寄る際、グロウスは光秀に向かって一太刀振るう。だが、残念ながらその一太刀は避けられてしまう。

ロイエは、グロウスの一太刀を避けた光秀に向かって矢を射る。その攻撃は予想していなかったのか当たり光秀のHPを少しだけ減らす。

ロイエは、当たった事が嬉しかったのか一瞬だけ口元を緩ませると直ぐに気を引き締めなおして光秀を睨む。

「さてと、これで3対1。グロウス、ロイエ。さっさとこいつも倒すぞ！」

ヴェスナーの言葉に、おう！ と答えるとグロウスは左手にワルサーIP5を装備する。人間状態の信長の、弱点が貫通属性だったからもしかしたらという考えで装備してみた。

そして、グロウスとヴェスナーは左右から同時に攻撃する。光秀は、同時攻撃を両手に持つ短剣で受け止め捌く。捌かれた時に、2人は

前のめりになりバランスを崩す。そこを、光秀は攻撃を仕掛ける。2人にダメージが与えられると同時に、光秀の顔の右横を矢が通り過ぎる。

それを見た光秀は、更に追撃するのをやめて後ろに下がり距離を取る。離れる時に、グロウスは体勢を崩しながらも光秀に向かってワルサーP5を放つ。

まさか、光秀も体勢を崩した状態で攻撃を仕掛けてくるとは思っていなかったのだらう。避ける事も適わず、銃弾を受ける。

そして、やはり貫通属性が弱点だったのか光秀のHPが今までよりも大幅に減る。その減った様子に、グロウスは喜びつつも体勢を立て直す。

立て直したら、直ぐに先ほどと同じようにグロウスとヴェスナーは同時に攻撃をする。そして、やはり先ほどと同じように短剣で受け止められるがグロウスは光秀に向かって、ワルサーP5を撃つ。

ダメージを受けた衝撃で後ろに後ずさる。その隙をつき、グロウスは雷切で斬りつけると、ワルサーP5を撃つ。ヴェスナーは、大剣を振り下ろし左から右へと払った。ロイエは、連続で矢を放った。

3人の総攻撃により光秀のHPは一気にレッドゾーンにまで減る。その勢いを殺さない様に光秀に追撃を掛ける。そして、漸く光秀のHPが0になった。

「信、長様もうしわけ、ごさいません！」

仰向けに倒れ、そう言うつと光秀は光の粒子となり消滅した。

光秀が消滅するのを確認すると、グロウス達は幸村の消えていった信長のいる城を目指して走り出す。

城へ着くと、グロウス達は中へ入り真ん中にある階段を駆け上がる。駆け上がった先には、幸村がうつ伏せで倒れておりその先には信長が椅子に腰掛けながらこちらを見て、切断したはずの右腕をしっかりと

り生やしており腕を組んでいた。

「貴様たちが此処に来たという事は、光秀は逝ったか……」

そう言うと、一度目を瞑りまるで光秀の事を思い出すかのように一瞬沈黙する。目を開けた信長は座っていた椅子から立ち上がり剣を抜く。

「では、我が覇道に貴様らは不要だ！ 消えて頂こうか！」

信長は一瞬姿を消すと、幸村の様子を確認していたグロウスの前に現れる。現れると同時に、剣を振るう。

信長の剣を受け止める事も出来ずに食らったグロウスは、後ろに吹き飛ばされ階段を転げ落ちる。

あまりの衝撃に、グロウスは呻きながらも立ち上がりポーションを飲みHPを全快させる。そして、武器を両腕にワルサーP5を装備しなおし階段を駆け上がる。あまりの速度に当たるか不安を残しつつ、階段を上りきるとヴェスナーが信長の剣を受け止めている姿が目に入った。そして、ロイエが信長に向かって弓矢を放つ姿も見受けられるが、信長は気にした様子もなくヴェスナーを攻撃し続ける。そこに、グロウスは連続でワルサーP5を放つ。すると、弱点が変わっていなかったみたいで、大幅にダメージを与える事に成功する。ダメージを受けた信長は、ターゲットをヴェスナーから信長に変更して襲い掛かってくる。やはり、瞬間移動しているかの様に一瞬姿が消えるとグロウスの目の前に直ぐに姿を現し剣を振るってくる。その剣を無様に転がりつつも何とか避けると、立ち上がる。だが立ち上がると既に、信長が目の前にいた。ダメージを食らう事を覚悟して攻撃しようと銃を構える。

しかし、振り下ろされる途中でヴェスナーが間に入り振り下ろされるようにする剣を受け止める。

「ほら、さっさとダメージを与えてくれ！」

剣を受け止めてそう言うヴェスナーに感謝をしつつ、グロウスは弾切れを起こすまで攻撃を仕掛ける。

合計32発の銃弾を受けた信長のHPは半分を切った。

「くっ！？ やはり貴様らは本気で戦わないといけないみたいだな  
！」

叫んだ信長は、後ろに下がると何かブツブツと言葉を言い始める。何を言っているのか距離が離れている上に声が小さいため聞き取れない。

様子を伺っていると、信長の言葉が途切れた様だった。

「うおおおおお……！」

雄叫びを放った信長の姿が変質していく。腕や足は赤黒く変色し太くなり、体も3倍ぐらいに膨れ上がる。そして、頭部に2本の角を生やし姿全体をこちらに見せる。

変質を終えた信長の姿は、鬼と称してよい姿となっていた。

鬼の姿になった信長を見て、グロウスは醜いなと思いつつもワルサーP5を外し、右腕に雷切を装備する。おそらく、今回は部分的な鬼化なのだろう。ならば、前回鬼化した後の弱点が斬属性だったのだから今回も斬属性に変わっているはずだ。

先手必勝。グロウスは、そう思うと信長へと攻撃を仕掛ける。鬼化したため、速度を失ったようだ。先ほどとは違う速度に、笑みを浮かべながら信長に攻撃する。

そして、予想通り弱点は斬属性に変わっていたみたいでHPが減る。それを、見たヴェスナーとロイエも攻撃を仕掛ける。

今回は、それほどの苦勞もせず、信長を倒すことに成功した。

「誰かが無理、やりにでも支配しな、ければ、人は争い続け、る…  
…！ そんな醜、い争いを我、は止めなければならんだ！」

そんな最後の言葉を残し、信長は光秀と同じように光の粒子となつて消滅した。信長を無事に倒す事が出来た3人は城を後にする。そして、城を出ると夕焼け空だったのが、夜の帳を下ろし美しい星空を曝け出していた。

## 第11話（後書き）

誠に申し訳御座いません。新しいネタを思いついてしまいそれを書きたい衝動に駆られています。

なので、この話でCreation of Origin（幻想たる魂）は完結扱いとさせて頂きたいと思えます。

また、一段落すれば再開しようかなと今は考えています。

ですので、勝手な話ではありますが再開した際に再び読んで頂ける事を願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2305z/>

---

Creation of Origin ~ 幻想たる魂 ~

2011年12月29日02時47分発行